



紀行文集

海草

伊藤藤銀月編著



海草

伊藤銀月編著

カ
入

集文行紀

海草

著編月銀藤伊



海草

伊藤銀月編著

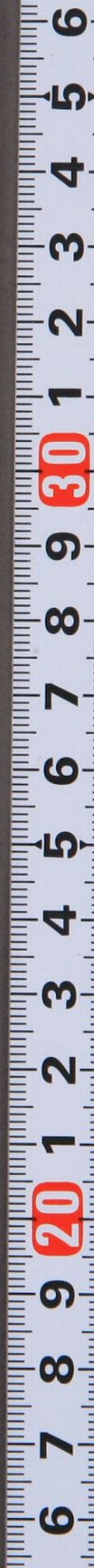
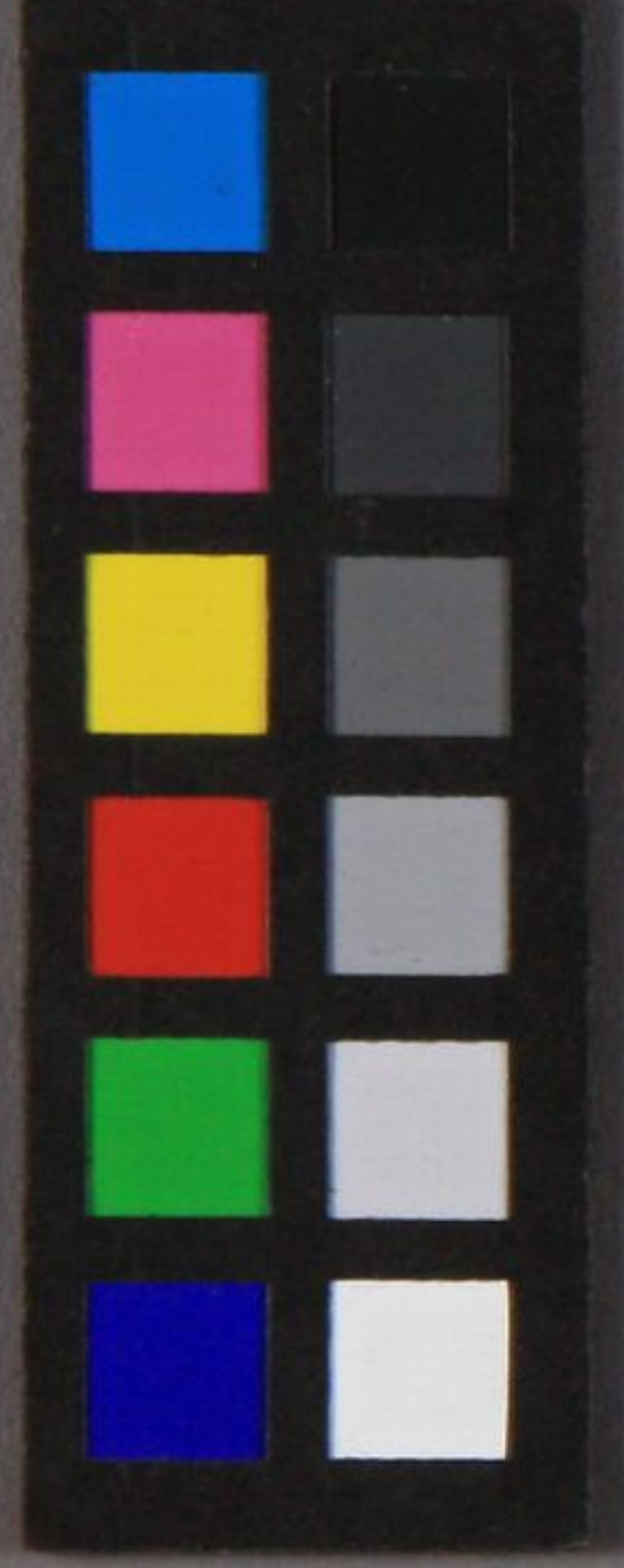
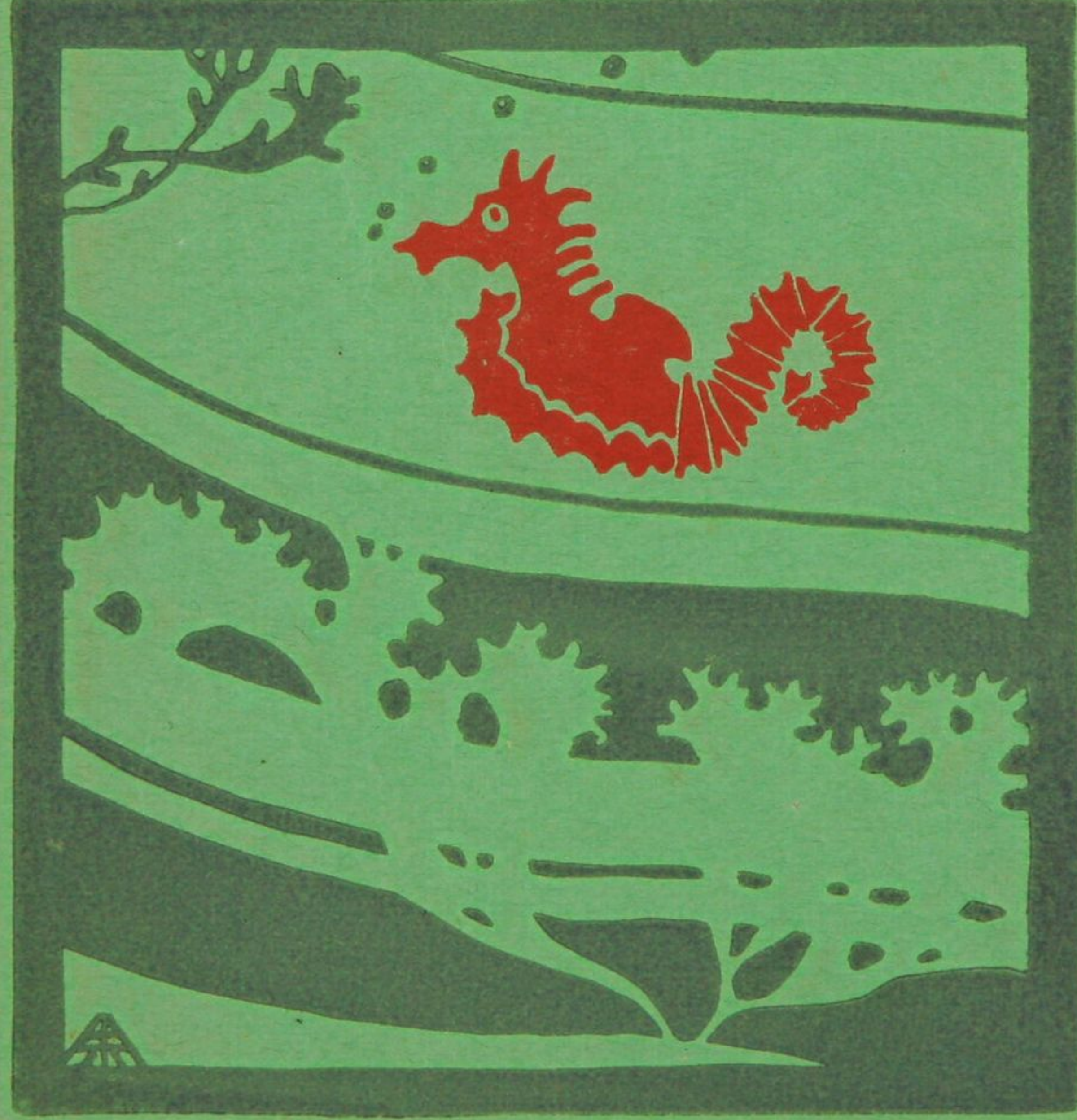
十八



集大行紀

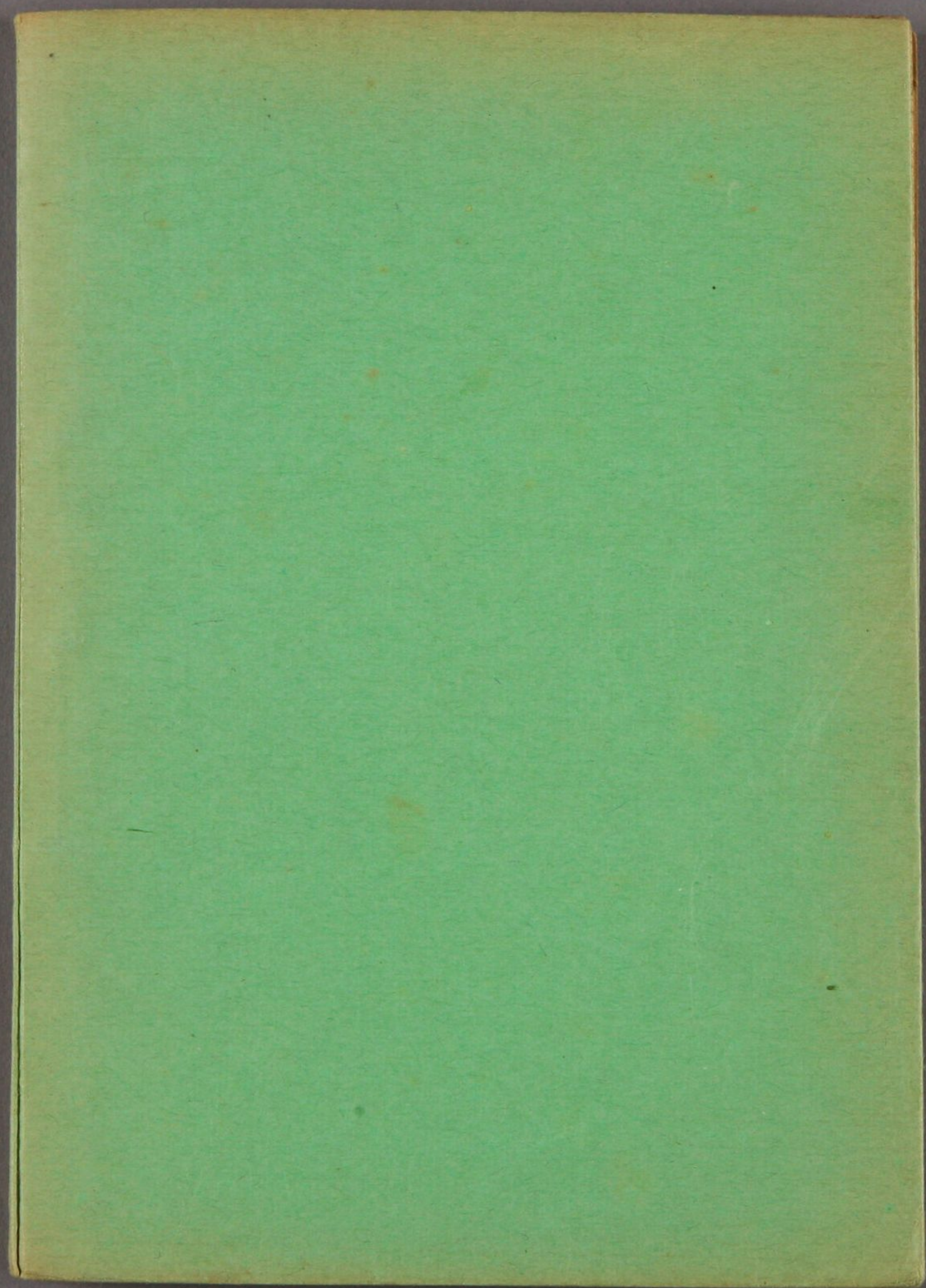
草海

著編月銀藤伊



海
草

伊藤銀月編者





DO
神田

い
み
し

い
み
し



海草目次

海の漫畫

第一圖	鱒	雲
第二圖	頓兵衛氏	
第三圖	騎長鯨入東海	
第四圖	風	待
第五圖	大物	浦
第六圖	玉盜人	
第七圖	老漁夫	
第八圖	海にあらば	
第九圖	呑めぬ恨	

次 目



第十圖……………松風待ちやれ

海の紀行

驅熱紀行……………伊藤銀月

其一……………十八日の朝

其二……………途中の事共

其三……………三崎着

其四……………城ヶ島巖頭の開會

第五……………大椿寺の夜會

其六……………油壺

其七……………美なる一夜

太平洋上より……………阿川青楓

伊勢灣の波濤……………淺井花唄

印度洋航行記……………山本研治

其一……………新嘉坡解纜

其二……………鳶の魚の飛行

其三……………焦熱地獄

其四……………驟雨來

其五……………極樂園

其六……………追分節

其七……………強風怒濤、船暈病

其八……………洋上の蝴蝶

其九……………古倫母寄港

其十……………タルララー、ホンペーヤイ

其十一……………釋尊の靈蹟、寶石細工、錫蘭茶

海賊の一夜……………河合裸石

北海の沿岸七湮……………大江浩洋



相模灘の三十分……………永 比東
 極北の海……………齊藤觀子
 土佐の鯉……………畠中白紅
 相模灘越え……………永井嘯月
 出羽の海……………大江浩洋
 肥後の海岸……………大庭雪岳
 月眉島畔……………小松萬石洞
 姫 島……………鈴木翠嶼
 月夜の清見瀉……………金 紫 潮

海の詩文

百子 姫……………川上眉山

白帆に寄する歌……………兒玉花外
 海に走りて……………兒玉花外
 海の記臆……………齋藤弔花
 船 艙……………平塚 篤
 男 の 面……………塚原澁柿
 嵐 の 夜……………小林鐘吉
 難 風……………山崎紫紅
 船路のわかれ……………せせらぎ

大 尾

DO
神田



DO
神田



DO
神田



DO
神田



凡考
△



DO3
神田





DO
神田



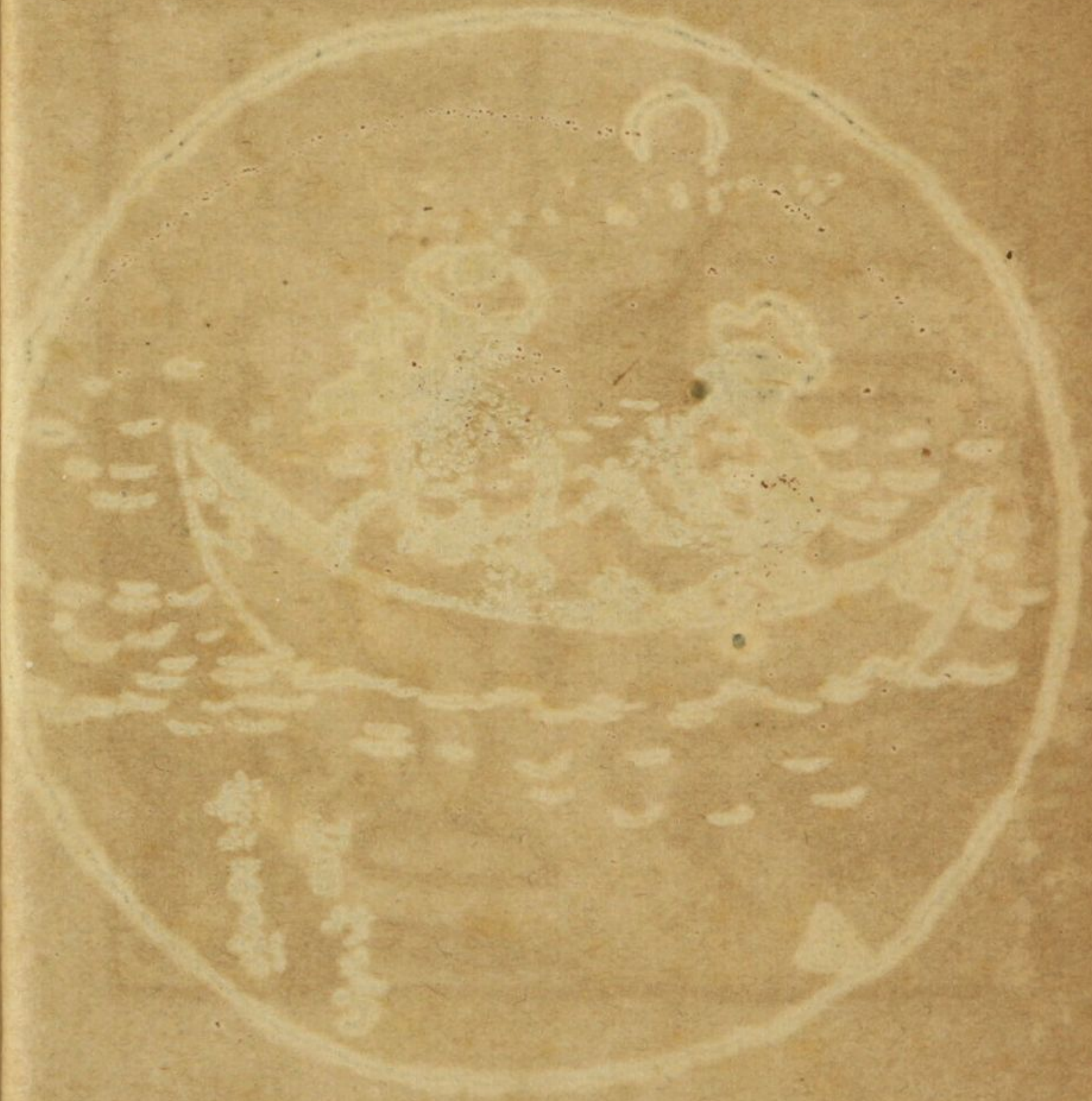
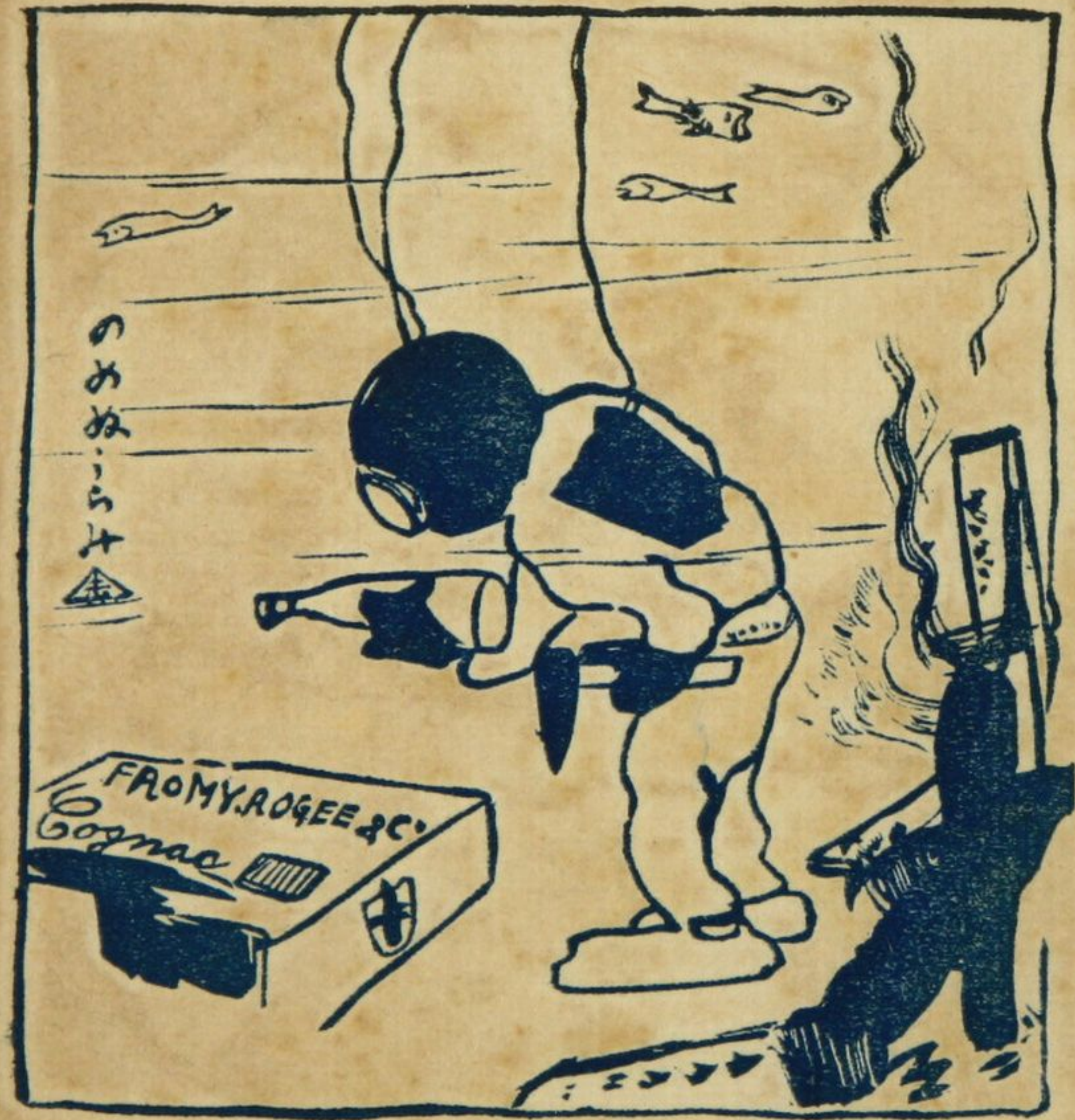
DO3
神田



海はあらば
比目たらむ



DO3
神田



DO3
神田



DO3
神田

海草

驅熱紀行

伊藤銀月

其一 十八日の朝

十七日の夜は、明日の天氣を氣遣つて、幾度も庭へ降り、大空を見上げたのであつた、北斗七星鮮やかに見える、銀河もラッすと天半に横たはつて居る、これなら大丈夫だと、自分に都合のいゝやうに空の相場を定めて、安心して眠に就いたのは十一時に近い頃であつた。

四時の時計が耳に入り、矢庭に蚊蠅を刎ね上げて飛び出した、空を見上げると、一體に薄雲がかゝつて居る、けれども雨になりさうにも見えない、底日がさして蒸し暑い日と覺悟したら、それで濟みさうに思はれ

る。

ゆつくり仕度をして、ゆつくり飯を食つて、女は別けても細かい事に時間を費したが、それでも五時二十分頃には門を出ることが出来た、切通し迄俥に乗つてそこから本所まわりの街鐵へ乗り、茅場町から深川行に乗換へて、永代橋の手前で降りた、これから靈岸島の汽船發着所迄は四五町ある、重たい鞆を提げてのテク／＼歩き、豫想した通りに蒸暑いので、イヤ随分と苦しい、川面をすべつて来る朝風、いつもなら餘程涼しくなければならぬのだが、今日は蒸氣のやうな肌障りで、怪獸の舌にでも舐められるやうに氣持がわるい、まだ底に雨を持つてゐるのだらうしつこいやないか。

榮橋へ來ると、『ヤア』と聲を掛ける人がある、誰かと見れば、溪石君に仙骨君、大關と綽名される力量拔群の溪石君は、『其鞆を持ちませう』

と、辭するも肯かず引つたくつて、いと輕々とひつさげて呉れた、ホツと息して手首の汗を拭つた僕は仕合だが、これが因縁になつて、行きも歸りも、始終溪石君が重荷を引受けられたのは氣の毒であつた。

汽船發着所へ入つて見ると、待合の客が二十人ばかり、煉瓦造りの狭苦しい建物の中に蠢いて居る、其わるく暑いこと、戸口を入るとムツと咽せかへるばかりである、誰か來て居るだらうとあたりを見廻はす此方より、向ふが早く此方を見附けて、『ヤア』と聲を掛けたのは花外君、此日の先登第一は即ち花外君である。

其中に會員らしい青年が續々やつて來る、けれども其大部分は嘉納治五郎氏の講道館の連中で、松輪へ游泳に行くので、我々の仲間ではない、其小部分も亦單獨で三崎邊へ行くのらしい、中には、あちらへ歸る漁師を捉へて、頻りに魚釣りの話をしてゐるのもある、臙て俥に乗つた小肥

りの八字髻先生は嘉納氏で、縮みの單衣に質素な袴を低く穿き、黒絹の紋附羽織を着て居られる、我々の仲間はなせ來ないのだらう。

最早出發時刻の七時に近くなつて、笑ふが如く怒るが如き一種の奇聲は、遙かの彼方から町を動かして響いて來た、問はずして知れる是れ快男兒柳田泥柳君なるを。

戸口を出て見ると、泥柳君と一緒に來る洋服の男は家弟天籟である、泥柳君は紺飛白の單衣に白い袴を穿いて居るが、袴の裾は消防の纏ひのやうに豎に幾條にも裂けてゐる。

七時過ぎても切符を賣らない、どうしたのかと聞くと、三崎からの船が今朝後れて着いたから、自然出船も後れるのだと云ふ、けれども、遅くとも八時には必ず出すとの事である、さうしてゐる中に、ガツリと音して切符賣出口が開いた、モウ占めたもんだ。

八時十分には、我等の一行は、隅田川の泥水に泛ぶ小蒸氣船の甲板に立つて居る、後れて來た面々も馳せ加はつて、可なりの人數になつた。

其二 途中の事共

小蒸氣船の甲板の上には、特別室と云つたやうな天井の低い一間がある、嘉納氏及び同行の洋服先生、商人風の親仁、冬のインパネスを着た暑さうな書生さんなどが、先客として座を占めて居る、僕と妻とは此中へ入つた、他の人々は暑さうだからつて、口から覗いただけで逃げて行く、僕等は甲板の上でテントを透す日に蒸されるよりは好からうと思つて、こゝを動かない事に定めた、多分あとから特別室の料金を取りに來るのだらうと思つてゐたら、そんな事無く、早く來て座を占めた者が勝ちださうである。

室の外なるテントの下は非常に般やかである、船首の方には、嘉納氏

DO3
神田

の連中と我々の連中とが雑居で、室の兩側の細い所と、胴中の廣い所とは、男女老若の旅客が、二の字、八の字、丁の字に算を亂して横たはつて居る、花外君はあまり船に強くないかして、數度すゝめたが室内に入らない、鮪組の中にまぢつてテントの下に臥て居られる、弟天籟は始終船首に突立つて風に吹かるゝの快を貪つてゐる、溪石君はツツとしゝ居ると氣分が悪くなるからとて、切りに仙骨君を挑んで坐相撲を試みて居る、獨り泥柳君のみは、外へ出ては外を殷はし、内へ入つては内の者を笑はせ、斷えず目まぐるしく活動し、且つ口を措かず喋りつ歌ひつ唸りつして居る。

東京灣の小蒸氣船は、僕に取つてチツとも珍らしくない、十數回乗つた經驗があるからである、だから初めは室内で新聞などを見て居たが、ツロツ船が揺れて來たので外へ出て見ると、モウ横須賀沖へさしか、

つて居る、のろいやうでも早いもんだ。

鼠色の帆を掛けた満船が幾十艘となく波に弄ばれて居る、其中を縫ひつゝ、我が汽船の進むのが、如何にも面白く思はれた、臆て觀音崎の燈臺が見えて來て、波が一呼吸毎に高くなる、けれども、多くの場合に比べて、今日は穩かな方の部である、僕はモット波が高くならなければ面白くないが、多くの人の爲めにはこれがいい。

それでも苦しうな人が少なくない、例の船室の傍の細い所に、二十前後と十六七との娘が二人、細紐一筋で倒れて居るのは、就中見苦しい概して、男より女が船に弱い、酷く時化て來た時などは、平生なら自殺しなければならぬ程の淺ましい有様を呈して自ら知らないのがある、醜態と云はんよりは、寧ろ氣の毒で面を蔽はなければならぬ場合がある、僕は嘗つて臺灣へ行く船の中で、酔つてゝ竟に死んだ女を見た、其他

DO3
神田

婦人の船に酔つた有様に就て、多くの経験のある僕は、此二人の爲めにこれ以上に波の高くならぬやうにと祈つた。

室に入つて再び新聞を手にすると、遮二無二人を押分けて轉げ込む者がある、みんなが恟りして目を注ぐと、それは子を抱いた三十ばかりの女である、『御免なさい、気分が悪くなつて來ましたから』と云つたまゝ、見得も無く「く」の字形に身を倒して、蹴く子をば無理に抱きすくめ、其儘目を瞑るのである。今迄甲板の上に居たのが、波音の凄さに追立てられて逃込んだのであらう、形勢かくの如きに至つて、私かに危みつ、妻を顧みれば、靴に凭れて浮かぬ顔乍ら、左程苦しさうにも見えぬ、たゞ、來られる筈の高橋氏姉妹が見えないので、少なからず失望の様子である、女の船に強いのは寧ろ面憎いものさ。

母の苦みを子は知らない、一歳ばかりの女の子で、丸々と肥えたのが

母の腹を兩足で蹴り、弓のやうに反りかへつて、しきりに身を逃れやうとするのである、とうとう滑り抜けて這ひ出し、僕の膝へ兩手を掛けてつかまりだちをし、始めて自由を得たとしても大人なら云ふやうに、『ア、ア、』と心地好げに呼ばはつて、ニコニコ顔である、菓子をやると、一つ宛兩方に握つて、ヨロ／＼となり、ドンと尻餅を搗くと、そこは泥柳君の胡坐の膝の上で、隙かさず大きな黒い手に抱き上げられ、巧みにあやされたので、ペンを搔きかけたのが元の笑顔に戻つた。

不器用らしく子を抱き乍ら、『愉快愉快々々、モット大きく揺れると、なほ愉快だ』と、泥柳君が無遠慮の高聲を上げる、僕も内心は同感であるが、傍に臥て居る其子の母を見れば、氣の毒で口へは出されぬ、亦心で思ふさへ罪である、で目交せをして泥柳君に注意すると、頭を搔いて『ヤーア、ハ、、、』と凹み入る笑顔珍無類。

是等の物音に、子の母は目を開く、手は物を抱へた形になつてゐるが抱へられた子は疾に抜け出て、他人の掌上に翻弄されつゝあるのである、目を圓くして飛び起きたのは無理が無い、けれども、彼女は始終の事を察し得ぬ程神経が鈍くはなかつた、我等に叮嚀に禮を云ひ、それから衣紋を繕ひ始めた。

折しも、船は浦賀の港に入りかけて、汽笛の響と共に大きな揺れが止まつた、子の母は急に元氣を回復して、雄辯滔々と、自分は三崎の住人である事、此船には一ヶ月一二度の割で乗るが、生來船に弱くつていつも必ず酔ふ事、船で寝轉ぶとよされるから、わざと汚ない着物を着て居る事、三崎では今祭りがある事等を息をも繼がず演説し、初めの意氣地無き有様と對照すれば、鮪が鯖に變化したやうな驚きである、我等は呆然として云ふ所を知らない、『イヤお暑う御座いませう』と泥柳君が扇で

あふいでやつたのは好かつた。

其三 三崎着

浦賀迄は、航路の長い割には途中に立寄る所がないので、左程退屈を覺えなかつたが、浦賀から三崎迄は目と鼻の間に過ぎぬに、下浦、金田、松輪などと、立寄る所が癢に障る程多く、油を賣る時間が馬鹿に長いので、ほんとうに飽き／＼してしまふ、お負けに出船が一時間後れたのであるから、三崎はまだかと待ち焦がれない者は無い、松輪で嘉納氏の連中が降りて、俄に船が廣くなると共に、城ヶ島は徐ろに來つて我々を迎へる、一同ホッと息を吐く。

舊識の三崎の風景は、四方八面からパノラマのやうに我々を圍んで、一々應接に違がない、海南神社の祭典で、町の彼方此方に立つてゐる幟も、太鼓の音も、一面に於ては我々を歓迎するやうに見える、暫く甲板

の上からあたりを見廻はしてゐる中に、汽船の會社からのハシケの外に、西の濱のはとりから、紙の旗を舷頭に掲げた小船が一艘漕ぎ出し、眞一文字に此方を指して波を切る勇ましさを、やゝ近づく儘によく見ると、果して、眞先には見事に日に焼けた吟鶯君の笑顔が日に輝いて見え、花唄、華陽、其他諸君の笑顔も、船に充ち満ちて居る、我々の目には、城ヶ島にも、歌舞島にも増して、心地のいい眺めである。

半数は吟鶯等の歓迎船に乗り、半数は會社ハシケに乗つて岸に着いたツロ／＼繋がつて西の濱の八右衛門方へ繰り込む、八右衛門は吟鶯君が居られる所で、我が驅熱文學會員の豫定宿舍の一つである。

廣い二階は人で一杯になつた、人體の熱、汗の臭は午後二時頃の烈しい日を帯びて、室内さながら蒸籠のやうである、けれども、新なる愉快に鼓舞された人々の青年的活氣は、暑熱を壓倒して屁とも思はぬ、談

笑湧くが如く、此家の外に人立ちがする程である、吟鶯君が階子の昇降幾十回となく、茶よ飯よ何やかやと骨を惜まず周旋さるゝ、泥柳君が例の奇言妙語、五分間と経ぬに初對面の人々をして其快男兒たるを認識せしめたる、尾張國の兩君が遠路を厭はず來會せられた熱心に相當する愉快な状態ある、どちらを見ても此上無い満足である、別けて多とすべきは幹事兩人の内花外君は例の詩人的、僕は又我儘無頓着の上に氣の利かぬこと日本一と來てゐるので、實際の幹事の役目は吟鶯君に歸し、心身共に多忙を極められた事である。

今、揚げ場で見た鯉の色、全體プラチナのやうな光につゞまれて、所紫碧の閃きを帯んで居るのが、我々の目に非常の快感を興へ、東京では見られぬと語り合つて來たのだが、愈々飯となつて、食卓の上に並んだ皿を見ると、薔薇の花を拵り散らしたやうな其刺身、左無きだに狼の



如く飢ゑた我々の腹は、之を見るや更に一層の食慾を起して、食ふわく、飯も鰹も口の中へ飛び込むやうである、就中、大關たる溪石君と泥柳君との腹に、最も多くの鰹と飯とが飛び込んだやうであるとは、全く餘計な勘定。

飯が済むと、正直なもので今度は居所の相談、一緒に居た方が便利であるが、豫て大椿寺へ申込んであり其爲め向ふでは障子を貼りかへたり、下女を二人雇ひ入れたりして待ち構へて居るさうであるから、西ノ濱と向ヶ崎と三崎町の兩極端に別れて、萬事の打合はせに不便ではあれど、行かない譯には參るまい、そこで、花外君一人だけは、吟鶯君の連中に加はつて西の濱に止まる事とし、其他は食後の運動を兼ねて向ヶ崎へ向つた、町は、祭りの般ひで湧きかへるばかりだが、我々の一團は更に祭りの般ひを壓倒するの氣勢で、人を驚かし且つ自ら驚きつゝ進んだ、何

にしる、泥柳君一人で二十人に匹敵するの般かさを呈するのだから堪まらなう。

六七町行くと、海水深く陸地へ食ひ込んで灣をなした所がある、こゝに渡し船があつて、賃錢貳厘、水の幅は二町ばかりである、向ふの岸へ着くと向ヶ崎、同じ三崎町の中ではあるが、やゝ獨立の姿で、海南神社の祭典にも加はらず、水の彼方に比べては氣風もシミなやうに思はれる、湯屋は一軒あるが、三崎町の中央部の湯錢一錢五厘に對して、向ヶ崎は一錢である、以てすべての差違を測るべしである、今一步を進めて云へば、中央部には、潮風に晒され乍ら色の天然に白い女が少なくない、漁師の趣味を帯びぬ純然たる商人が多い、けれども、向ヶ崎には色の白い女が殆んど無く漁師の趣味を帯びぬ純然たる商家は、大椿寺の門前に在る荒物兼酒店一軒である。

大椿寺は、頼朝が別荘椿の御所の舊跡である、庭に大きな遮莫天しゃぼくてんはあ
るが、昔を忍ぶに足るべき椿の木は無い、後の山の半僧坊の堂は眺望に
富んで居るけれども、路が崩れて今は登れない、本堂に並んだ八疊二間
と四疊とを我々は占領した、妻は草臥れた様子で一人休んで居る、僕は
和尚と御婆さんとに對して久濶を叙する、其間に、活動を愛する血氣連
は、思ひ／＼に町と海との觀察に出掛ける、我輩は向うの湯屋へ行く、
妻は据風呂へ入る。

彼是する中に夕飯の時刻となる、活動連は二人三人づゝ續々歸つて來
る、或者は神輿を昇ぐ漁師共の豪壯な有様を語つて切りに讚嘆する、或
者は幾代餅いくよもちと云ふ名も優しい餡コロ餅を食つて來たとて盛んに吹聴する
神輿の通るのを湯屋の二階から見下す者があつたので漁師共が承知せず
忽ち湯屋の板塀を蹴破つて亂入した、どうも其勢ひの凄まじかつた事と

一人が云へば、山車だしと山車とが衝突して双方の撲り合ひになる、一個の
荒くれ男が、夜刃の如き勢ひで多勢の中へ飛び込むと、疊んでしまへと
八方から拳の雨が降る、衆寡敵せず退却する拍子に、切石に向ふ臍をシ
タ、カ打附けてホカリとひどい音がした、我々の脚なら確に折れる、そ
れでも、南蠻鐵を鍛へたやうな身體を持つて居る件の男は痒いとも云は
ない、又もや味方の一群と共に敵中に突進した、どうも驚きましたねえ
と一人が調子を合はせる、見に行かない僕等は、たゞ感心して聞くばか
りである、さうかと思へば、幾代餅に就いての艶つばい來歴談が始まる、
昔々の其昔江戸の吉原に、幾代と云ふ全盛並ぶ者無き華魁があつて、大
名か金持の客でなければ相手にしなかつた、そいつの道中を、江戸見物
に行つた三崎の漁師が一目見て、正直しやうじきに魂を天外に飛ばし、男と生れた
甲斐には云々の獨白があつて、一晚必ず買はうとの、須彌山を崩して大



海を埋めるやうな願望を起し、多年の苦心の末とうとう其思ひを遂げた所が幾代は案外にもむくつけき漁師のまごゝろに感じ、年明けて後、態々三崎へやつて来て、お前の女房になりたいと御詫言、何が扱て、漁師の野郎喜ぶの喜ばないのつて、新しく大きな神棚を拵へて、幾代大明神と崇め奉りもしかねまじき様子を、幾代は自分から謙つて、女房は女房らしくしなければなりません、夫婦共稼ぎと云ふ事がありますから、お前の手助けをするのが道ですけれども、わたしには荒くれた業が出来ませんので、思ひ附いたのは食べ物商賣と、臈て始めたのは餡コロ餅屋、昨日迄賣り込んだ源氏名を其儘餅の上に冠せたので、人の好奇心は都も卑もかはらず、毎日毎夜目が廻る程の繁昌、爾後百幾十年、人は亡けれど名のみは煤けた掛行燈に残つて、我々の口に迄も入つた始末と、面白げに語るを聞けば、どうやら昔し江戸であつた幾代餅の話に似て居るやうである、これは江戸の吉原の幾代でなく、多分昔の三崎にも幾代と云ふ娼妓があつて、江戸の幾代の話聞きかぢり源氏名の偶然に同じい所から思ひ附いて、向うを張ると云ふわけでは無く、年明けて後ホンの真似事をやつたので、もあらず、それにしても食たいものだ。

夜になると、西ノ濱連が大舉して來襲した、其後新たに入會した高橋親吉、谷義久、菊池繁雄三君が一緒にやつて來られたので、錦上更に花を添ふるの趣である、三君は二町谷に居られるので、之を二町谷組と呼ぶ事にした。

其四 城ヶ島巖頭の関會

十九日は、城ヶ島背面に波打際に於て、驅熱文學會を開くの豫定であるから、朝飯了るや寺に擲飯を頼み門前の酒店で五合徳利を一本詰めさせ、今日は此方から、全軍擧つて西ノ濱の攻撃。

此方からの携帶品は、三角形の摺飯數十個に、澤庵と梅干ばかり、酒は少ないけれども、花外君一人の爲めにするのであるから、これで間に合ふだらう、大椿寺が辨當の時にばかり禪寺的特色を發揮することに就いて、少なからず不平の聲があつた、弟天頼などは、庫裡に向つて談判を開始しやうと敦圀いさまく、それ等を我輩が制止して、宿屋でないからと諦めさせた、其代り西ノ濱には鯉の煮たのがあり、一同で附近の天麩羅屋に命じた小魚の天麩羅もある、各自が買った菓子、夏蜜柑などもある、九時頃豫て雇つてある船へ乗つて城ヶ島の西の端なる燈臺の下へ押渡るに及び、『愉快々々』の叫び聲は泥柳君の專賣に止まらなくなつた。

我等が船の通る水路は、底が海草と巖とで、所々に貝殻の粉末から成り立つた砂地が挟まつて居る、三崎の岸はすべて巖で、泥を吐き出すべき川がない、だから、此邊の海の澄明なことは、玻璃も、水晶も、物を

持つて来て比べることが出来ない、二三尺もあらうと思はれる所が、實際一丈餘りの深さである、僕は嘗つて實驗して心得て居るから、さう云つて話したが、誰も信じない様子である、泥柳君などは、飛び込んだら腰のあたり迄水に漬かるだらうぐらゐに思つてゐる、已むを得ず船頭に頼んで、僕の言の誤り無きを證明させると、始めて感心して『へーエ』と奇聲を發した。

城ヶ島に着いた、漁師が地面一杯に網を擴げて居るので、通り路が無い、踏んでもいゝかと聞くと、踏んで下さいと云ふ、踏んで見ると、思つたとはちがつて、無暗に足へ引つかゝりもしない、懸て燈臺の下を通つて、小さな沼の縁を縫ひ、晝顔、撫子などのしほらしく咲いた小徑をたどり行くと、黒い巖と白い波との外には何も無い城ヶ島の背面へ出た、巖を飛び砂を蹴て左へ〜と島の裾を繞り行く、崖の下の日の當ら

ぬ所をトして、濱菊の葉香ばしきはとり、乾きたる荒布あらめの上に、三枚の
蕙むしろを敷いた、日はあり乍ら空は薄白く陰つて、東京はさぞ暑いだらう、
大島も、天城も、富士もうつすりとして、有れども無きが如くである、
景色になりやアしない、けれども流石に涼しいのは感心である。

肉體を鍛へ、精神を養ひ、身も心も共に裸はだかになつて無邪氣に自然ふところの懐
に投じ。縦まゝに海洋の氣を吸ひ、其趣を味ひ、而して後眞率豪健なる
文學を吐き出さうとするのが、此會の目的である、星董的軟弱文學を驅
逐するのである、男が白粉を附けるハイカラ文學を排斥するのである
形式的な演説や何かは一切ヌキにして、互に臂を把つて快く談じ、角力
を取るなり、泳ぐなり、引ッくりかへるなり、勝手に遊び、其間自然に
得來れる所を、後に至つて詩歌文章となし、之を集めて一冊子を作り、
今の世の流行物なる神經的衰弱性の青年の頭に、興奮劑たる豪快の氣を

吹き込むのが、我等が驅熱文學會の破天荒なる所以である、見得や氣取
りは此會の禁物である。

食ふ事と遊ぶ事とに熱心な人ばかりで、喋しべる方が餘り盛にならない、
吟鶯君が海南神社の縁起に就いての話、油壺に大きな章魚の主が居ると
云つて人の泳がない話、僕が城ヶ島の住民に就いての話など、何れも面
白い筈ではあるが、左程人々に興味を興へることが出来なかつた、搏飯
を頬張る、菓子をつまむ、盃を傾ける、天麩羅を詰込む、香の物を噛む、
誰を見ても兩手が塞がつて居ない者はない、イヤこんな所で食ふ物は何
でもうまいよ。

ソロ／＼相撲が始まりかける、僕は先登第一の意氣込みで、巖の間か
ら海へ飛び込む、我々の外に人が居ないと思つたら、潜つて魚を捕る漁
師が彼方此方に出没して居る、彼等の裸體は巖の色と黒さを齊しうして

ゐるので、遠目には判別が附かなかつたのである、彼等の一人は、銚さすで突いた魚を示して、僕にそれを買はないかと云ふ、モウ飯を食つてしまつたから要いらないが、鳥賊があるなら貰はう、おれは生きた鳥賊を潮水に揉んで食ふことが好きだと云へば、鳥賊は無いと首を掉つて、向うの巖陰に入つて了ふ、僕は波の間から手と聲とを擧げて、岸に居る我々の仲間を呼ぶ、半分は相撲の方へ行き、半分は海へ来る、海へ来る連中には花外君の青白いからだが最も目に立つた、それから感心に堪へなかつたのは、仙骨君の痩せ乍ら血色の悪くない白いからだが、いくら相撲を取つても水に漬かつても焼けない事と、溪石君の左無きだに黒いからだが相撲を取り水に漬かる毎に益々黒さを加へ来る事とである、一はどうしてあんなに黒くなるだらう、併し溪石君は依然として強い、勿論足許の定まらぬ砂地である上

に、島の裾で地面が傾斜してゐるのである、加之誰も一生懸命に勝を争ふのでないから、此日の勝敗は左程重さを置くに足らぬが、溪石君はいくら取つても、いくら相手をかへても、更に草臥あつぱれはしない、息使ひ、顔色、常に平氣の平左である、どうしても大關の値打はある、之と面白いコントラストは泥柳君である、黒さの溪石君に劣らぬところ、先づ適あつぱれ見事と申すべくこちらは溪石君の常に平然たるに對して、忽ち草臥あつぱれ又忽ちに元氣を回復して、一昂一低大海の波濤の如く連續して窮極する所を知らない、彼は熊の如く此は虎の如くである、彼を牛とすれば此は馬である、溪石君の黙々として微笑を帯べる、泥柳君の快談轟笑愈々出で、益々奇なる、亦是れ好對比と云ふべしである。

充分に食ひ充分に遊んで、モウ歸らうと云ふ段になつた、今度は徑ちかみち捷を取つて、城ヶ島の邱上を横斷するのである、自然の石を削つて階段に

した急な坂をば、陸續魚串して登る一行、固より八釜しく云ふ巡查も無く、他の見る人も無いのであるから、各自勝手次第の扮装いでたちをして居る、洋服もホワイトシャツも脱いで小脇に引ツカ、へ、肉襦袢一つで來るのもあれば、醬油色になつた臺パナの帽子の下から、濡手拭の兩端を鬢の毛のやうに垂れ、袴も單衣も滅茶々に丸めて兵子帯で括り附け、裸體の上に西行背負ひにしたのもある、イヤハヤ飛んだ假裝行列である、邱の上から振り返つて見れば、遙かの海面に數千の薄黒い水鳥が輪をなして飛んで居る、これに好奇心を刺戟されて、アレヨ〜と指して居るうちに、氣早の手合ひはズン〜進んで、僕の以前に來た時には無かつた測候所とかの建物へ入つて、水を貰つて飲んで居ると云ふ始末。

高い所を横つて、先に登つた反對の坂を降りやうとする時、三崎の岸の景色は目の前に古い錦繪を置いたやうに開展する、油繪でも無く、當

世風の日本畫でも無く、時として、日と雲と空氣との或る合併作用が西洋風の建物の見えない土地の景色を、一時全然古代錦繪化することがある、今我々の眼前に横たはつて居る三崎の町はそれである。

坂を降りると城ヶ島の部落で、四丁餘の海水を隔て、傲然三崎の町に對立する數十家はこれである、路だか人の屋敷内だか分らないやうな所を曲りくねつて行くと、高く部落を踏まへて聳ゆる大きな建物がある、木立薄暗く茂つて、如何にも涼しさうである、これは城ヶ島の寺で、三崎通の猪股君は此寺とも心易い、我我一同が水を呑みたさうな面を見てどうです此寺を襲撃しませうかとは氣が利いた、誰一人異議を唱へる者のあらう筈無く、例の百鬼晝行の異形な行列は、吟鶯君を先導としツロ〜蛇のやうに繋がつて寺の門を潜つた、庫裡へ入つて、半分は廣い上り框へ腰を掛け、半分は土間へ立ち並び、餘つた者は外に立つて居ると

時を移さず一桶の水が出る、三つ四つのコップが出る、遠慮をする人と
餘計渴かない人とは後になり、遠慮をせぬ人と渴いてたまらぬ人とが先
を争つて、冷たい水だとの譽め言葉が、兎に角一巡り済むと、又ドヤ／＼
繰り出す、犬が吠える、法界節が半分溶けたやうな聲で唸る、こいつら
は、三崎の祭りを當て込んで横須賀あたりからやつて來たのであらう、
黒山のやうに集まつて居る半裸體の男女の間を押分けて通ると、法界節
よりも我々の姿が珍らしいかして、法界節の包圍は解けて我々の包圍と
なる、果ては法界節迄も見物人の側かたにゝつて、我々の假裝行列を拜觀す
ると云ふ始末、暑くつて、汗臭くつて、女の頭臭くつて、たまつたもん
ぢやない、一目散に逃げ出して濱邊へ出る、渡舟らしいのへ飛び込む、
耳の遠い老船頭が櫓ろこ臍せを濕しめし乍しば何所どこへやりますべえかと云ふ、渡舟は
渡舟だが、此島と陸との間のは、不規律寧ろ樂天的で、三崎の區域なら

此方こちらの望みどほりの所へ着けて呉れる、其代り遠近に依つて賃錢に五厘
か一錢の差等があるのである、そこで我々は向ヶ崎の方が近いから、先
づ向ヶ崎へ着けてそれから西ノ濱へやつて呉れと頼む、所が、向ふの耳
へ通じない様子で、ポカンとした顔で我々を眺めて居る、代る／＼大き
な聲で云つてもまだ通じない、耳の根へ口を附けるに至つて、ヤット會
得の首肯きを見せた、厄介な船頭殿ではある、獨り此親仁ばかりでなく、
三崎の渡船の船頭は皆ヨボクヲ老朽連であるから、どうした理由わけかと聞
いて見ると、漁師の古手の沖へ出られなくなつたやつがやる隠居仕事だ
さうである。

二間ばかり船が出ると、洋七和三の雜種の犬が、何と思つたか我々を
目掛けて泳いで來た、乗り込んで濡毛を振はれちやアたまらないから、
岸へ追ひ返せと云ふまゝに、手を拍ち聲をあげて嚇かすと、せう事なし

に元へ引返しさうにするが、それがやむと再た追つ掛けて来る、船の中
 では衆議まち／＼、或は、今朝燈臺の下へ上陸した折此犬を見たと言ふ
 者があり、三崎から連れて來られて此島へ棄てられたのだらうと同情す
 る者の傍には、イヤ、三崎が般やかで面白さうだから城ヶ島の犬が我々
 と一緒に船へ乗つて、祭を見に行かうとするのであらうと、ませつかへ
 す者がある、さうして居るうちにも、船の脚は早いから、犬は遙かの後
 になつて、わづかに水の上に鼻を浮べ、見た所如何にも苦しさうである
 可哀さうに思つて、乗せてやれと船頭に迫る者もある、小さい時に犬を
 飼つた経験のある僕は、こんな事にかけては犬が却つて人間より伶俐な
 ことを知つて居る、必ず向うへ渡れるとの確信があつて泳ぐので、人間
 のやうに、溺れ死ぬのも知らず無鐵砲にやるのではあるまいと思つたか
 ら黙つて見て居たけれども、一方から船頭に迫る聲が愈々激しいので、つ

んぼう親仁もとう／＼耳を假さなければならなくなつた、『エッ、何でが
 す、あの犬かね、あれア泳いで渡りまさア、先刻も揚場から泳いで來た
 』から』と、一向平氣なものである、船を戻さうともしなければ止めや
 うともしない、早や船は向ヶ崎と三崎との間の灣に入らうとして、犬は
 一町餘り後れ、それでも一心不亂に我々の船を目掛けて居る、何だか可
 哀さうにもなつて來たが、どうも我々の船ばかり目掛けるわけが分らな
 い、船頭に聞くと、『先刻も船へ着いて島へ行つた』から、此船へ着いて
 泳いだら三崎へ歸れるだんべえと思ふんでがせう、犬は伶俐でさア』と、
 濟ましたものである、それでも若しやと思つて、何れも自分々々の事を
 打忘れ、わづかに見える犬の鼻から目も離さずに居ると、世の中には我
 々以上に苦勞性の人があるもので、避暑客らしい二人の男が小船を漕ぎ
 出した、犬の前へ横にして我々の目を遮つた、暫くの間は二人の背後ば

かり見えだが、手が、りにステッキか何かを差出したらしく、驀然と躍り上がつて水振ひをする犬の全身が見えたので、始めてホッと息をした、所が犬の方は我々の掛念も二人の男の苦勞を察しない様子で、平氣も平氣、何か食物でもあるまいかと、船の中を嗅ぎ廻つて居る、やがて我々の船が向ヶ崎の岸へ着い頃には、犬を乗せた小船も三崎の岸へ着いた、岫と巖とすれるやうになるや、人より先に犬が飛び上がつて、其儘悠然と町を歩いて行く、へコタレた色も草臥れた様子も見えない、先刻から氣を焦つて居た我々の連中も、之を見て何だか拍子抜けのかたちまして折角犬を救つてやる意氣込みで行つた小船の二人は、手に持つた油揚を鳶にさらはれたお三宜しくの見得である。

一つ書き落したことがある、イヤ、書き落したのではない、大事にして仕舞^{しまひ}まで取つて置いたのだ、それは何であるかとなれば、我々の乗つ

た船が城ヶ島を半町餘り離れると、十間ばかりの横手に當つて、水から少し頭を露はした黒い巖がある、それが何も珍らしくはないが、其上に居る生物^{いきもの}が珍らしい、十二三から十五六迄の、人間の女の子七八個、無論全裸體で、或は立ち或は蹲まり、或は半身を水に浸して腹這つて居る黒さもあれ程になると、何かの彫刻物めいて却つて見苦しくない、一點のムラなく黒光りするのである、何れも感心してそれを見て居る中に、猪股君の口から甚だ調の高い聲が發した、『ア、實にいゝ、僕が目からあれを見ると、ダイヤモンドのやうに輝く、女神のやうに光彩がある、あれに限る』之を聞いて一同が笑つた、僕も笑つた、けれども僕は心から此言に敬服した、猪股君にして若し、金縁眼鏡庇髪に白粉ベタ塗り香水芬芬の式部を崇拜するのなら、我輩或は君の頭へ嘔吐^{へど}をかけるかも知れないが、一朶の黒百合に渴仰する君の眞率には、新體詩人にもこんなの

があるかと、覺えず爽然自失せざるを得なかつた。

其五 大椿寺の夜會

船から上がつて直ぐ大椿寺前の湯屋へ飛び込む、湯錢を拂はうとしても人ツ子一個居ない、『オーイ』と呼ばば奥の方で『グー』と答へる、妙な返事だと思つて熟く聞き直せば、番臺に坐るべき婆々アが、奥に晝寢をして居るのである、呑氣極まる湯屋ではないか、我々は構はず亂入して蓋を取つて入る、まだ沸いて居ないが、海の水よりは少し暖かい、汗と鹽分とを洗ひ落して、早速出る、『オーイ、お錢は要らないのか』と銅貨で番臺をたゝくに至つて、婆アさんやうゝひよろけ出る、『モ一湯が沸いたかへ』と客に聞くと云ふ始末。

愈々大椿寺へ引上げやうとすると、渡し場の方から急いでやつて來る袴青く衣白き人がある、向うと此方とが一度に『ヤア』と聲を掛け合ふ

野溝紫光君が一日後れての參會である、一同大に勇み喜んで、紫光君を昇ぎ上げぬばかりの勢ひで寺へ入ると、又もや後から石壇を昇つて來る人がある、例の猪股吟鶯君の日に焼けた笑顔、齒ばかり白いのが目に立つて、花唄君、華陽君、其外一人の今迄居なかつた人が見える、緑の廣い麥稈帽子を草（まき）の化物のやうに冠つたのが、仰向いて始めて顔を見せた又もや『ヤア』と『ヤア』との掛合ひ、横川浪月君が來たのである、思ひ掛けない二個の新手が加はつて、會はこれからと云ふやうな景氣になつた此日の晚餐の膳の般ひつたら無かつた。

夜になると、大椿寺の八疊二間と四疊とを明け通して、四ノ濱連も二町谷組も残らず參會、藝盡くしの無禮講が始まつた、唯だ兒玉花外君が急に歸京の必要を生じて、今夜の汽船で三崎を辭されるので、折角生え揃つた齒がまた一本缺けるの憾み無き能はずである、況んや花外君は、

會の相格を形造るに重要な前齒である、一同が揚場迄送らうと云ふのを、途中に用事があるさうで、たつて辭退された、其實用事も何も無いけれども、折角の夜會の腰を折るを氣の毒に思つて、あんな事を云はれたのだらうと、あとでみんなが噂をすると、吟鶯君が笑つて、『船へ乗る前にこれをやられるのです』と、手を以て盃を仰ぐ形をした、一同大笑ひ、流石に花外君は花外君である。

たつた一人の上戸たる花外君は去つて、あとは下戸黨ばかり（中には爪をかくす鷹があつたかも知れぬ）、名物幾代餅を頬張り、庫裡の大茶釜を干す迄番茶をガブ呑みしての藝盡くし、何れもシラフで洒蛙々々とするのだから、巧拙は兎に角、其度胸の据り加減に至つてはまことの藝人にも劣らないのである、中にも柳田泥柳君の落語に至つては、奇中の奇妙裡の妙なるもの、糞も味噌も混同して、清潔不潔の差別を超絶し、能

く自由自在に舌を役し態を弄ぶ所、一種の禪機を得て居る、氣障でなくて甚だ宜しい、それから、野溝君が折紙附きの吟聲、淺井君の琵琶歌、但し、野溝君は腸胃をいためて衰弱して居られるので、平生程旨味のあつる聲が出なかつた、エンヤヤでも、新體詩朗吟でも、追分でも、喇叭節でも、何でも蚊でもやるのが吟鶯君、其般やかさは正に泥柳君に匹敵するに足るのである。

澤大關が相撲の呼出しは其人物にふさはしかつたが浪月君が卒然として歌ひ出した船唄の、一種云ふべからざる凄美の調を動かして、月下に薄れ行く波間の小舟に、多恨の人が胸底の思ひを寓するを聞くが如く、一座をシンミリとさしたのは、實に驚くべき異變であつた、武骨の人とばかり思つたのは大間違ひである。

皿廻はしあり、盆廻はしあり、坐り相撲あり、足相撲あり、笑つてく

笑ひ抜いて閉會したのは十一時頃明日は新井の城址、油壺灣を探討しやうとの企てがあるから、西の濱二町谷の連中も己が塹に歸り、我々も眠りに就いた。

其六 油壺

泥柳君に笑はせられ乍ら、暫くウツラ／＼とした迄は覺えて居るが、何時しか夢に入つて曉方迄一寢入り雨戸のガラ／＼する音に目を覺ませば、仙骨君か誰かがいの一番に起きて、新しい空氣を入れやうとして居る、『サア、夜が明けた、起き給へ』聲を掛けると、ウーンと唸つて身を延ばす者もあり、ムニヤ／＼と云つて細く目を開く者もある、これから數分時の間は便所が大繁昌、懸て蚊帳は退けられる、蒲團は疊まれる箒の音ザア／＼／＼と一切りして、疊の上に青葉の影が光り出した。

膳が出る、手拭を提げた人が、ヅロ／＼井戸の方から歸つて来る、喋

る食ふで又々大賑ひである、飯が濟むと直様仕度、泥柳君は庫裡へ辨當の催促に行く、婆さんが風呂敷包みの重箱を持つて来る、一同阿彌陀佛を留守番に寺を出たのは朝の八時頃である。

例の渡しを越えて町へ入り、果物だの菓子だのを買い、荷物は一纏めにして、代る／＼持つ事と定め、途中で女の子(十歳以下)に逢つたら次の順番の人へ渡し給へと云つたが、何れも自分ばかり樂をしやうとの伶俐な人ではないから、『僕が代らう』『イヤまだい、』と荷物を奪ひ合はう始末、どうか社會の萬事に此風を應用したいものである。

西の濱へ行くと、吟鶯君がやう／＼顔を洗つて飯を食ひ掛けて居る、他の諸君は疾うに濟んだが、此人一個寢坊をしたのである、あたりを取巻いて飯食ふ顔を批評されるのだからたまらない、ソコ／＼に箸を投じて立ち上がった、こちらの辨當には御馳走があると見えて、出来ること甚

だ遅い、やう／＼出来てサア出掛けやうと云ふ段になつて、二三人見えなくなつた者がある、呼んでも答へがない、捜しても見えない、『仕様が
ないなア』と皆々舌打をする、其中に平氣な顔をして出て来る、何所へ
行つたんだと聞けば、あんまり仕度が長いから、待ち草臥れて散歩に行
つたと答へる、過ぎ去つた事はどうでもいい、が、これから自由の行動を
取られては困ると斷つて、愈々油壺行の途に上る、浦賀横須賀行の大道
を騒がして、往來及び兩側の人家の者を驚かし、耶蘇の説教所がある
と云つては立止まり、大きな胡瓜があると云つては立寄り、猫が居る、
井戸があると云つても道草を食ひ、やう／＼町を出て畑中の道となつた、
砂利が光る、草いさがする埃が立つ、空はドンヨリとして、蒸暑さこ
と云はん方なしである、僕は早く大道から横へ切れる所へ行かうと、脇
目も觸らず歩みを進める、振り返つて後を見ると、十歩後れて来る人、

二十歩後れて来る人、半町後れて来る人、一町後れて来る人、来るか来
ないか見えぬ人、まだ一里餘りの路を控へて、此ていらくでは何時行け
るか知れぬと氣を揉んで居ると、弟天籟が路傍の腰掛茶屋から何か大き
な紙袋へ入れた物を持つて現はれ出たのが、遙かの後に見える、すると
大勢が寄つてたかつて袋の中の物を求める様子である、天籟袋を高く上
げて首を掉り、自分で手を入れて、一攫みづゝ大勢の手へ分配する、み
んながそれを食つては又手を出す、愈々袋を高く上げ首を掉り／＼此方
へ驅けて来る、何だと聞けば楊梅、それは珍らしい物だ、おれにも少し
と、人に後れて一攫みの分配に與る、實に美味、渴いた時にこれ以上の
物が無い。

やう／＼大道から切れて枝道へ入る、風に向つて少し涼しくなる、溪
石君が持つて居る荷物を無理に奪つて、僕も一番昇いで見る、行く程に

路が急に低くなつて、樹木が左右の崖から枝を交へ、穴の中へ入るやうに薄暗い、其代り冷たい風が下から吹き上げて、何とも云へぬいゝ心持である、夏の旅程苦しい事は無く夏の旅程快い事は無い。

扱て早や新井の城址である、油壺灣を左にし小網代灣を右にして、海の中へ突き出た岬角、全體巖で出来て、上に少しの土を衣て居るのがそれである、道寸の墓に詣で、荒次郎の墓に詣り、數十丈の絶壁の上に立つて、近きは小網代灣から遠きは江の島に掛けての景色を見渡せば、餘りに好くつて悲しくなる程である、それから坂を降りて大學の臨海實驗所を訪ふと、丁度係りの先生が居なくつて、番人の親仁一個、網を繕ふか何かして居る、井戸の水を貰つて飲み、油壺と反對の岸に樹陰を求めてこゝを休み場所にした、例に依つて、我輩が率先して海へ飛び込む、相撲を取る連中は相撲を取る、取つて草臥れると、皆バラ／＼に海へやつ

て来る、海草が生えて居るに、貝殻の缺らがあつて游泳に適した所ではないが、反對の岸に向つた油壺灣は人の入らない所だと云ふから、己むを得ず此所にしたのである、何故油壺へ人が入らないかとなれば、昔し三浦荒次郎が落城の時、千段櫓の上で腹を切つて此灣へ飛び込んだ、其他三浦家の勇士一人も残らず、或は刺しちがへ、或は腹を切つて、飛び込み／＼主君の跡を追うた、其血と膏とが淵の上に浮いて、長い間失せなかつたので、灣の名を油壺と呼び、人に祟りをなす魔所となして、誰も近づく者が無かつたのである、此因縁に搗て、加へて、油壺の中には大きな章魚の主が居り、人がはいると搦み附いて水の底へ引きずり込むと云ふ噂が、何時の代からか傳へられた、實際そんな事もあるまいが水が非常に深くつて、何となく物凄く、荒次郎其他の者の骨が、今でも底に横たはつて居るやうに思はれて、あんまり心持がよくないから、歴史

に敬意を表して、油壺へは入らぬことにした。

充分潮水に漬かつてから、腹がへつたから飯にしようとの事になつた重箱を開いて見ると、例に依つて西ノ濱のには御馳走があるが、大椿寺は梅干に澤庵の何所迄も一點張り、それでも残らず平らげてしまつてと暫くは腹こなしの運動をやり、モウ歸らうと仕度を始めた。

すると、油壺の奥から漁船一艘出て來た、亭主が臚を押し、嗚アが棹を操つて居る、僕は壺の口を向うの岸へ渡ると、先刻來た路より三分の一も近いことを知つて居る、そこで早速談判を開いた、『オーイ、向うの岸迄乗せて行かないか』乗せませう』これで話が出来た、船は岸へ横附けになる、暫くあつて岸の上には人影が無くなり、其代り船の中の賑やかさは、油壺の主の章魚入道も恟りするばかりである、横川浪月君が手に下げて居る物を何ぞと見れば、二尺ばかりの海蛇を藁で括つたやつ、

食ひ附かれないやうに頭をたゝき潰してある 漁師から貰つたのだとの説明であるが何の用に供するのかと聞けば、こいつを蒲焼にして食ふと結構である、寺へ歸つてから自分の手際を御目に掛けるこの事、海蛇の蒲焼！こいつア成程横川君のやりさうな事だ、我輩二十代の時には、烏蛇からすへびの干物を食つたこともある、猫鍋も蛙鍋もやつた、海蛇の蒲焼と聞いて大に食慾を動かさざるを得ない、途中天日に晒して味を變らせないやうに、大事に持つて行つて下さいと頼んで、獨り喜び興するのである。

臚て船は對岸へ着いた、城ヶ島と三崎との間の半分もないのに、二十錢とはペラ棒にふんだくるもんだ、此漁師あまり質たちが良くない。

歸り途には別に話しが無く、二時頃の暑い盛りを汗と埃ほこりとに塗れて歩いて、やうく町へ入ると、西ノ濱連に二町谷組は右へ去り、我々は近路を取つて、山陰の涼しい坂を直ちに渡船場へ降つた、坂を降ると氷屋が

ある、油壺の井戸で呑んだ水は、既に汗となつて發し盡くし、我々の身體は切りしきに水分を要求するのである、誰が發頭人とも無く、皆ドヤ〜と倒れ込んで呑むわ〜、一盃二盃から、三盃四盃に及んで尙ほ止まぬ者もある、氷屋大繁昌且つ大多忙。

それから渡しを渡つて、又海へ飛びこんで、散々魚の眞似をして、モウ充分と大椿寺へ引上げた、都合に依つて、浪月君と仙骨君とをあとに残し、其他の一同は今晚の船で東京へ歸らなければならぬ事となつた、三崎の海へ入るもこれが此度の千秋樂である。

其七 美なる一夜

今夜は大椿寺にも御馳走がある、鯉の刺身の外に榮螺の壺焼が出た、海から取つたのを直ぐ焼いて食はせるのであるから、固より向島の花見の頃にほに臭はせるやつとはちがふ、それに何よりの珍味は、例の横川主膳正

が手づから庖刀を取られた海蛇の蒲焼、暖かい飯の上に載つけて食ふと結構だとの教へに隨つて、早速串を抜き取り、其通りにやつたが、どうもナト變だ、イヤ、變ではないが功能書き程の旨味はない、どちらかと云へば、先づ不味まづい方に近い、どうですと侷ぢめても澤大關と弟天籟とが一口づ、やつただけで、流石の柳田豪傑すら箸を着けない、それに第一迂散なのは、しきりに海蛇の美を吹聴した浪月君自身が少しも聞召きこしめさぬことである、けれども細かく氣にしては限りが無いから、僕だけは經驗のために充分食つてのけた。

今夜の十時の汽船で歸る、あとに残された浪月君と仙骨君とは嘸淋さそしからうが西ノ濱二町谷の連中と往來して仲好く御遊びなさいと云ひ残し一應船の模様を偵察する爲め、我輩一人八時頃に立ち出でた、所が渡し場へ行つて、片足を舟へ掛けやうとすると、闇を衝いて向ふから來る舟

に吟鶯君の聲がする、隙かして見れば、白地の浴衣を着た連中が六七人見える、一步退いて『ヤア』と云ふうちに、向ふの舟の人は皆岸へ上がつた、猪股君が一個未見の人を紹介して、『この方は寺澤崇美君と被仰つて今晚始めて入會せられましたと云はれる、まことに遺憾、責めて昨夜なら、今日の油壺行を一緒に願つたのにと、今晚是非歸らなければならぬ我々自身の都合を恨むのである、けれども最早仕方がない、『私は一寸場場迄驅けて行つて來ますから大椿寺へ御出でなすつて、諸君と御話しなすつて下さい、直き返つて來ます』と、匆々に袂を分ちて舟の上の人となつた。

揚場へ行つて聞くと、今晚は十時半に船が出るとの事、それからだん／＼歩を進めて聞いて見ると、此口から出る船は三盛丸と云つて、永代橋の少し上み手へ着く、我々が乗つて來た汽船とは會社がちがふ、其代

り此會社の船には特別室と云ふのがあつた、普通賃錢の倍額を出せば、そこへ入つて樂に居られるとの説明である、それは結構、いづれ連れの人々と協議の上に切符を買はうと云つたら、今から買つて置かなければ、或は特別室が定員に充ちて仕舞ふかも知れないとさ、我輩大に困つた、自分には一同の特別切符を買つてやるだけの持合せはないし、それに今紙入を懐にして來て居るのでないから、自分だけの切符を買ふことすら叶はない、どうしたらよからうと茫然たる顔の前に、一個の生き／＼した人間が現はれた、これは大椿寺の下の荒物兼酒屋の若主人で、以前から僕と心易い、東京で長く商業の練習をした江戸ッ兒式の青年、火移りのいゝキビ／＼した男である、僕と汽船屋との問答を傍で聞いて、切符の代を立て替へませうと云ふ、それは忝けないと云つたが、他の諸君のは、都合も聞かず勝手の取計ひをする譯に行かないから、僕の家の人

分だけを立て替へて貰つて、特別切符を買ふことが出来た、寺へ歸つた
ら早速返濟しやうと約束して別れて大急ぎで戻つて見ると、寺澤君はみ
んなと談笑して居られる、一通りの挨拶から四方山の話に移つて、見え
ず時を費やし、モウ出掛けなければなるまいとの注意が一隅から起るに
至つた。

行く者も止まる者も、打揃つて揚場を般はすべく出た、門前の荒物屋
へ立寄つて、若主人はまだ歸らぬが先刻切符代を立て替へて貰つた事を
老主人へ話し、それぢやア御預り申すと云はせて金を渡し、渡し船の親
仁へも、毎日世話になつたと云つて少し握らせ、祭りの名残りでどたつ
きかへして居る町を通つて、懸て揚場へ着いた、寺澤君が船中の要心に
と、寶丹二包を買つて來て政女へ渡されたのは、深く感謝すべき事であ
つた。

モウ船が出る時刻であるのに、マダ／＼客を乗せさうな氣配は見えな
い、それも其筈、沖から歸る鯉船が少し後れて着いたので、今や必死と
獲物を汽船へ積み込みの最中である、御承知の通り鯉は腐り易いものだ
萬一此汽船に後れたら、一日の漁師の勞力は滅茶々々になつて仕舞ふの
である、随つて全力を擧げて、成るべく短かい時間に、成るべく多
くの魚荷を積み込まうとの彼等の活動は、斷じて山の上にも野の上にも
見られない壯觀である。

納屋^{なや}から棧橋に掛けて、カンテラ^{かんてら}篝火^{かきりび}は天を焦がし波を焼く、人は皆
赤裸々で、日に焼け潮に焼けた銅色の見事な身體^{からだ}に、濕布なす汗を流し、
篝火に映つて輝いて見える程である、納屋の大きな車井戸からは、二人
が、りで間斷無く水を汲み上げる、汲み上げては鯉の入つた四斗樽へ注
ぎ込む、二個の荒男が、籠を昇くやうに其樽をかついで、トットトット

と驅けて出ると、棧橋の中程には、更に二個の荒男があつて、氷の大塊を一端に積み上げ、斧で碎いては樽の中へ抛り込む、暫し足を停めたかつぎ手は、又もや驅け出して、海の中へのめり込みはしまいかと氣遣はれる程端へ出たと思ふと、忽然として樽は無くなつて、二個は空身で戻つて來る、暗中に端艇があつて、其樽を受取るのである、實に、篝火の下で氷の大塊を碎く時の凄美の光景は何とも云はれない、人間活動の氣其勢、其熱が溢れて、最上の力美を現じて居る棧橋の上に、氷のカケラが火花より鋭く迸るのである、氷の迸ると共に、虹の如き蒸氣が迸るのである、それが、一生懸命死者狂に働いて居る荒男共が熱した銅のやうな脚へぶつかるのである、細かに聴いたらシューッと音がしたかも知れぬ、天は雲厚くて、海に磨れるばかりに低く垂れ、海は壓迫されたやうに押静まつて居る、城ヶ島は絶大の怪魚が背を露はしたやうに暗中に

横たはり、其燈臺の不動綠光は怪魚の眼のやうに輝いて居る此天地を打破する人間の活動、我々は船に乗せられることの遅きをも忘れ、寧ろ自分は今船に乗らんとするの身なるをも忘れ、唯だ讚嘆の聲と共に此凄美の光景に見惚れて居た。

鯉は盡く積み了られたと見ると、間も無く人を乗せる端艇が現はれる一同之に運ばれて汽船に上る、甲板の上に並んで三崎の岸を見渡すと、萬點の燈火は緩く高低するのである、居残り連は、頻りに棧橋のほとりから聲を掛ける、此方はそれに應ずる、臙て汽笛は鳴る、ゴトン〜と響がして船は進み出す、其時何者ぞ、我等が船を既に發せるに留めんとは。

城ヶ島の一角、燈臺を距ること半町ばかりの沖の方に、奇々怪々の物象が現はれた、眞暗な海の上に薄明りを保つて、赤黒く閃く葩はなびらを有つ

た菊の花のやうな活物が、猛烈に其葩を動かして、忽ち開きつ忽ち蓄みつ漸次に我々の船へ近附いて來るのである、若し我々か大洋の真中で不意にこんな物に出ツくはしたら、海魔に襲はれものと信じなければならぬ、何故に汽船はこれを見て停まつたらう。

や、近づく儘に、それは一艘の漁船で、真中に篝火が一つ點り、十數人の裸體漢が、全力を注いで艖を操つて居るのと分かつた、葩と見えたは裸體の一つ宛で開くと見えたは艖を引く時、蓄むと見えたは艖を推す時である。

忽ちにして、件の漁船は箭を射る如く我等が汽船の胴中へ突き來つたアハヤ舳がぶつつかる、其船が粉塵になると、冷汗を握る一瞬間に、横へ反れて、スーッと音も無く、汽船の腹へペタリと糊附けになつた、汗盡きて血を噴かんばかりの荒男共を手の指のやうに使つて、真中に座を

構へた老爺がある、五分ばかりに延びた月代に、大たぶさの鬘が蜻蜒返りを打つて居る『ソレッ』との一呼吸に、一樽の鯉をドゥと汽船の腹の中へ投げ込んだ、それを合圖に汽船は波を切り始める、漁船は煽りを食つて漂ひ乍ら、又もや艖拍子勇ましく真一字に西ノ濱を指して漕ぎ戻る、實に其間の一呼一吸、極めて危険の間に在つて極めて安全なこと、名人の擊劍もこれ以上には出まい、それが、海と空とが一緒になるかと思はれるばかりに暗く重い夜色の中の現象であるから、一層凄美の觀を興へたのである。

真黒な波を押分けて船の進むに連れ、海月が夥しく光る、青白の極、久しく見て居ると紫に變じさうである、凄とも美とも、此夜は別けて平生に無い觀物である、それに、劔崎燈臺の廻轉白光が、忽ち明るく忽ち暗く恰も靈ある物の如く海に臨むと、暗々たる海は其光の末を呑み込んで

自己の凄味を加へる、廻轉して、光の裏面の提灯のやうにドンヨリした所を現はす時には、鬼氣が天地を鎖すやうである、こんな晩に水死人の幽霊が海魔と化するであらう。

睡くなつて來たから寢た、幾度も目が覺めたが、無精に構へて起きない、僕の家の中の三人の他の諸君は、普通の切符で皆特別室へ入つた、否、特別室へ入つたのではない、特別室に居る我等を訪問に來て、つひ話が長くなつたのである、夜半に船の者が切符を調べに來た、其形勢を嗅ぎ知つて、泥柳君が逸早く外へ抜け出し、それとは無しに他の諸君を呼んだ、獨り寢惚けて出口を失つた溪石君だけが捉まつて、切符を拜見と切り込まれ、更に其切符だけの金額をふんだくられたのは、滑稽否氣の毒であつた、大關の力も、斯る場合用ふるに由ないのである、それから、下層の船室に鮪の如く臥て居る大勢の中から、面白い動物が發見された

浦賀から乗つた客で、一盃引呷けて居ると見え。歌ふやら、唸るやら、嘸鳴るやら、義太夫もやる、詩吟もやる、船中の景氣を一身に集めた、其癖若い者では無く、五十餘りの肥つた坊主頭の男で、漁師でなければ魚屋であらう、それを、甲板に居る泥柳君が、息拔きの穴から覗いて睨し立て、終には降りて引きずり上げ、甲板の上でやらした、非常の般ひに夜の明けるも知らなかつたさうである、けれども、以上はすべて我輩の寢て居た間の出來事で、品川へ行つて目が覺めてから報告されたのである。

永代で上陸したら朝の五時半。

太平洋上より

阿川 青楓

時はこれ爽氣に満つるの仲秋。

アメリカ丸は横濱を出帆して早や五日目、今青曇の如き波静かなる太平洋上を東へ〜と走れるなり。

夕陽は今船體と一直線の後方に當つて水平線下に沈まんとしつゝ、あり瞬々に船は去り日は沈み、此世の將に終らんとするに似て、甲板に佇める余の孤影次第に淡く立單むる夕靄次第に濃く、水天の際漸くおぼろげに、眼界漸く狭くなり行くなり、落日は波に隠れて再び現はれ再び隠れて三度び出でず、單身波濤を蹴て遠く世界の一角に飛ばんとする身にも轉た寂寞の感は湧きて、一種言ふべからざる孤獨悲哀の思ひに堪えず、悄然として俛首れ、腕拱いて黙想すること久し、海上の落日は山間の其れと異なり、沒了と共に頼みに暗黒を來すものにて、首脚を掠むる涼風に不圖我れに返り、己が下層室に踵を回さんとする時、いつの間にか來りけん、我が後に、年の頃十九許りなる洋装美しき日本少女佇めり。

寂しき船中の人懐しき故にもあるべし、「とうとう沈んでしまいましたね」と優しき聲にて阿迦の他人の我れに言葉を掛けぬ、此女先程より其處に居たるものと見ゆ、我れも「沈んでしまいました」と同じ事を言ふ、「あなた何處迄いらつしやるでいますか」「僕ですか、行くんぢやないです」「オヤお歸りですか」「イ、エ歸りでもないです」「それでは……」と怪訝の面持して、問ふべき語を知らぬものゝ如し、我れは片頬に寂しき笑を泛べて「人生れて素と三界に家なし、何處から何處へ行つたり歸つたりするんです、僕は今横濱から桑港へ向つて走る船の上に居ると云ふ丈けです」「ホ、ホ、」と女も微かに笑を漏して、先刻よりの余の言、始めて半ば解し得たりと言ふかたち、「何處からおいでなすつたのです、東京ですかホ、ホ、これは悪ういしました、それではお生れ故郷は何處で御居いますか」

「僕の生れた所ですか、左様ですな、僕は其故郷と云ふ奴を廣く解釋するのです、ですから日本の東京でもなし、世界の日本でもなし、太陽系統の地球でもなし、若し此太陽系統のやうなものが全宇宙間に幾つもあるとすれば、僕の故郷は實に此太陽系統と云ふ一村落なので、地球と云ふ家に生れたのです、日本などはほんの小さな一室に過ぎない、僕は今其日本と云ふ一室から亞米利加と云ふ他の一室へ通ふ廊下を歩いてると考へて居るのです、同じ家の中をのたくり廻つて居るのに行くの歸るのなどと云ふ事はないんです」

氣焰を吐いてもこの纖弱の一少女を驚かさんとするにはあらず、以て自ら慰めんとするのみ、余が此一場の囁語に可憐の乙女は何を感じてか、表情に富める聲にて「その位の御氣象でなければ、あの日本を後に見て知らぬ他國に……」と次第に細くなりて、果ては何事か考ふるもの、如

く、旋て「愉快なお方ねえ」と獨語ちぬ。

聞けば此乙女、米國にて商業を營める父の此度歸朝して一家を引き連るゝに隨ひ、斯くは渡航の途に在るなりと、「貴郎、親御様はお國にお壯健であらつしやるんですか」

あゝ親の事、唯獨りにて在す母の事、心あらば君は問ひそ、余は端なくも茲に心中の弱線を引きかたて言ひ知らぬ感慨を生じ、無言にて俛首れ勝に數歩を運びぬ、彼女は余が此有様を哀れと思ひけん、徐かに余が手を執りて「其處迄御一緒に参りませう」

四隣は暮靄に籠められて、早や空には星影薄く燦めき初め、船中はボトイ水夫の忙はしげに上を下へと走せ廻る。

纖弱の身を省みず、遠く異域に赴く少女の勇氣に免じ、内地觀を以て余の手を執りし清き彼女を蓮葉なりと評するを恕せ、是れ必ずしも余が

嬉し紛れの辯護のみにあらず、なほ、茫漠たる前途を望んで、胸中無限の寂寥を湛えたる折も折、卒然此少女の慰藉に會ふ、余が内心些か自惚れたる罪をも宥せ。

此夕、仲秋の空隈なく霽れて、月高く星稀れに、水面は遠く濛々として夢の如く、見渡す限り一點の火光を認めず、船は水上に浮ぶ月影を粉砕し間斷なく小波を残して進む、余は夕餉を了りて再び甲板に出で、月光を浴び月影を踏んで彼方此方を行きつ戻りつ、少女の爲めに喚起されたる、母を思ふの情に耽りぬ。

其夕、秋風面を吹いて征衣露冷やかなりき、横濱埠頭に余を見送り給ひし母上よ、今頃は如何に在ますらん、不幸の極みなる我れを咎めもせで、幸あれとこそ祈り給ふらめ、別るゝに臨んで腰の梓の弓を伸し、溢るゝ涙を拂はんとせす、杖を片手に袂を捉へ、我子よ、必ず一度は日本に歸れ、これ我子よ、必ず日本に歸りて、其無事の顔を今一度此母に見せてたべと、腸を絞るが如きお聲、今尙耳にあり、あゝ思へばく御心の中嘸や悲しう在すらん……、丈夫涙無きに非ず……豈澎沓たらざるを得んや。

我れはいつしか甲板の欄干に凭れて、面を仰ぎ、魂魄願くば皎々たる彼の月に入つて、五百重の波の彼方、幸く在す母の邊りを訪ひ得んと祈る。

星は千古の光りを下界に投げて、青く白く、宇宙の神秘を叫くが如し。俯せば月光星影波間に碎けて船と共に走る。

深々として太平洋上の夜の更ると共に、心は沈み思は絶え、身は飄々として次第に羽化登仙するが如く覺え、佛家の所謂頓悟、耶蘇の所謂精靈を感じて言ひ知らぬ心地となり、此形骸を有せるを忘れ、唯無形の我

のみ我ありと観するに至れる刹那、我は波上をも自由に歩むことを得るもの、如く思惟し、飄揚乎水面に舞ひ下らんとして初めて身の重さを感じ、再び茲に我は人間なりと意識しぬ。

此時後ろに天女の如き聲あり、「貴君何をなすつてゐらつしやるの？」
我れは、今は全く生身を持てる人間となり了りぬ、あゝ。

月は依然として高く澄めり、星は依然として青く燦めけり、船は依然として迷濛に向つて走れり。

伊勢灣の波濤

浅井花唄

「午後からは西風だから氣を附けて行きなせえよ」と船頭の云ふのを後にして、熱田を船出したのは、卅六年九月八日午前八時。

北風を帆に受けて走る心持のよいこと、

此船には歴史がある、それは僕等の學校にまだ一隻のボートもなかつた時（今では七隻あるが）、僕等の先輩數十人の熱心によつて出来上がったのだ、先輩の熱心は、遂に本校をして熱田海上の常勝者たらしめた、然し、事情あつて、今は僕の友M氏の父が此船の持主だ、先輩達も今は早や大學生などになつて居る、今夜は横須賀（遠州）迄行く筈で、乗込みの七人は皆セームクラスだ。

築港を出る時、船首に居たM氏の夏帽が空へ舞ひ上ると見るまに、早や數間後の海上に浮んだ。

伊勢の山々は明らかに見える、青く松原のあるが、木曾の川口であらう、海は靜かに小波が立つて居る。

横須賀へ着いたのは九時半だ、皆々陸へ上つて散歩して、正午頃に船へ歸ると、大變だ、干潮で船が腹を見せて居る。

二時迄待つて、やつと船を出すと、船頭はよく知つて居る、多度山に雲の峯が起つたと見ると、モウ西風だ、北西に歸るにどうしたものであらう。

なわに、七人のボート狂、ことに二人は琵琶湖上今年の大會の月桂冠を得た名譽者だ、かまうものかオールが、折れるか、腕が折れるか迄やるさ、諸君覺悟し給へと、誰れか叫んだ。

裸體で四人、船を海へ曳いて行くのだ、遠淺で、五六町出ても膝迄あるばかりだ、風は益々強く、波は高い。

試みに帆を上げて見ると、又々大變、陸に上がった間に帆綱を一本盜まれて居るのだ、馬鹿にしてやあがる。

沖の船の影さへ見えない、あかをかへる桶の運びの早やいこと、かへてもだめだ。

萬事休す、四本のオール二本迄折つた、二本で海上三里、如何して歸れやう、泣くに泣かれず、岸を離るゝ十數町、波のまにまに岸へくと流れ寄る。

船は横須賀に預けて、徒歩で歸らう、と相談一決、不完全の帆を上げると直ちにもとの岸だ。

岸に立つて僕等を見て居る人がある、何處か見た事がある様だと考へると、昨年我校を卒へたKS氏だ。

「君等は一中ですね」との向うの問ひが初めて、僕等の決議をも話し、船を頼む事にした、すると川口に熱田の船頭が居たのでM氏が走つて行つて何か話したが、歸つて、

「明日になれば此風もやむとの事だが、一泊するとしても金銭がないから、やはり徒歩で歸らう」と云ふと、KS氏が僕の下宿へ來給へ、宿代

は僕が支拂つて置くから、そして明朝歸つたらいい、でせう、さあ來給へ！
 つい泊る相談になつた、H氏一人は是非歸らねばならんからと、六時
 頃に徒歩出發した。

残りの六人は町の中央の米屋、商人御宿と行燈のある軒をKS氏の案
 内で、潜つて奥座敷へ上つた。

一泊一人廿二錢づゝ、歸つてから送金の事と條件付、保證人はKS氏
 で夜は九時、明日は風のないようにと祈つて床に就いた。

明れば九日、樂しかつた暑中休暇も今日一日で、明日からは學校へ出
 ねばならない。

風はやんで、海岸の朝心地のよいこと。

纜を解いた、うまく帆を上げやうと思ふ間もなく、又西風が出かけた
 昨日に劣らない、一層強い、船を曳いて歸るぞと、裸體でザブ〜。

もうよほど來たと岸を見ると、まだ三四町、いやになつてしまふ、や
 つと廿町程になつた。

身體の疲れたこと、もうこんな事はいやだ、三里も曳いて行つたら死
 んでしまふせ、誰ともなしに云ひ出して昨日の如く相談又々一決、岸に
 戻つた。

川口へ船をしつかり繋いで置いて、馬鹿に暑い日中、徒歩で熱田へ歸
 つたら、正午過ぎ廿分。

馬鹿にして居た小さな伊勢灣で、こんな目に會はうとは思はなかつた。

印度洋航行記

山本 研 治

(一) 新嘉坡解纜

汽笛一聲、馬來半島の南端一葦帯水の小島、美しい梭欄の花咲く其新

嘉坡の港、タンヨン、バガリの埠頭を發して、船漸やくモロッコ海峡に入れば、兩岸の丘陵青黛の如く、綠樹蒼鬱として翠色滴らんとする大小の島嶼波上に點綴し、其間を出没する獨木船の眞帆片帆、或は小蒸氣ラッチの細き煙を揚げて疾走するなど、光景轉た我が瀬戸内に髣髴たり、海峡を出れば是れぞ即ち印度洋、天高うして潮路遙かに汪々洋々、眼界涯りなく、折々行き交ふ艦船と半空に翱翔する水禽の影とあるのみ、時は六月二十四日の土曜日正午、此日曇天にして寒暖計百〇二度。

(二) 鳶の魚の飛行

五十海里も駛りぬらん、と見れば、行方の波間に突如として躍り出でし一尾の鳶の魚、我船の進行に駭きて、颯と海面を掠め飛ぶや、忽ち彼方此方より潑瀾として三尾五尾、遂に十數尾潮頭を出没しつゝ、一町二町翔り行く態、彼の春の野邊に蟲を齎る新燕に肖たり、これ洋上に屢々

看るの奇觀なりとぞ。

朝、艦の方に出たる日の出を拜しては、噫々莊嚴と絶叫し、夕は烟波渺茫たる舳に入る日を惜みて、座ろに、日暮孤船何處泊、天涯一望斷人腸、と吟じつゝ、波上夢安らかに三晝夜を過ごしぬ。

(三) 焦熱地獄

今、こゝぞ全く赤道直下、而も夏の眞晝、炎帝威を逞しうして天色爲に黄に、大氣重く濁りて微風片雲無く、煙筒より吐く煙は眞直に棒と立ち、船亦進まざるに似たり、喩ふれば油の海に薪の船、舳と艦とに泡立つ波は實に煮え沸る湯とばかり。

時、此時試に船底に降りて、焦熱地獄と聞きつる汽罐部を覗へば、宛然熱湯を浴びたる赤鬼の如き數個の火夫フライヤマンが、焰々たる焚口に向いて、鼻唄交りに石炭を投ずるを、嗟々この務、この働さ、而してこの餘裕、

誰か感嘆、敬服の念を起さざる者ぞ。

(四) 驟雨來

驟雨來、驟雨來、一滴の雨も珠の如き心地する熱海の航路、まして香港以來、待ちに待ちし十二日目の今、絶好の福音は誰れ云ふとなく、満船に轟き渡りぬ、看よ水平線上一朶の黒雲、倏忽疾風を起し、猛然として襲來し、愉快、愉快、恰も船は驀進、全速力、瞬一瞬、暑熱頓に去りて、二滴又三滴、刹那豪雨沛然、萬歳……、赤條々の總員嘻々として甲板上に躍る。

(五) 極樂園

翌火曜日早朝、左舷に三隻より成る同盟國の艦隊に遇ふ、食後乗客の健康診断を行ふ、午後暑氣殊に酷だし。

此夜波穩やかにして湖上を行くが如く、涼風微吹し、終日の苦熱を洗

ひ去つて爽快云ふべからず、顧瞻れば蒼冥たる大海の極端 白一髪の間より、金光忽ち闇を射て、玉兔萬頃の浪を走り出でぬ、風彌々冷かに氣愈々清し、上等 船客は運動場の安樂椅子に臥して給仕にビールを呼び、中等客の或者は欄に凭れてハーマニカを吹く、白襯衣瀟洒なる、歐人、浴衣輕らに胸毛を風に戦がする日本人、上半赤裸なるは甲板乗客の黒奴、甲板上は黒影參差談笑の聲盛んに各所に起る、皆これ無邪氣なる郷國談にあらざれば、前途の想像譚、此夜此境眞に海上の極樂園。

(六) 追分節

更闌けて甲板に隻影を止めず、潮風峭冽にして肌寒し、獨、毛布を纏ふて片隅に横臥すれば、月は蒼空を驅け、船は碧海を駛り、我は空想に走る。

折しも檣上に人ありて唄ふらく、「遠く離れて……逢いたい……時はヨ……」

其聲寂びたれども餘韻縷々として盡さず、^{ハツチ}船口の傍にまた聲あり和して
 唄ふ、「月が鏡にヨ：なればヨウイ：」、音細く調證み朗々綿々、飄として
 水天の彼方に消ゆ、深夜月前、波濤萬里の客船に在りて、斯の、斷腸悲
 哀の一曲を聞く、遊子の感慨果して如何ぞや。

(七) 強風怒濤、^{シーセツキ}船暈病

明くる、水曜日、半晴半曇、浮雲常なく驟雨屢々到り涼風颯々たり、
 船客多くは會談室に骨牌を弄し、碁將棋を闘はす、寒暖計八十九度。

翌木曜日、此日午後より強風吹き出で怒濤澎湃として起る、四十餘噸の
 巨船宛然木の葉の如く、「一上一下、一浮一沈、激浪狂瀾甲板を洗ふて其
 響き迅雷の如く、時に推進機の空廻る音さへ聞えて、心細きこと云はん
 方なく、頭腦眩惑、神身惱亂、只管臥床に獅噛み附きて、夢現の境に半
 日を過ごしぬ、夜に入りて風風ぎ浪收まり、舉船漸やく安堵の思をなす

翌、金曜日も同様、嘔吐、疲勞、昏暝、夢現の間に一日を消しぬ。

(八) 洋上の胡蝶

今日は懐かしい、陸の見える日、即ち古倫母へ寄港の日である、天明、
 臥床を出で、猶は船暈病に踉蹌たる双脚を踏みしめ、踏みしめ、覺束なく
 も^{ダラツテ}階段を昇りて甲板に至り、西の方烟波浩蕩水天微茫の果を望みて、思
 ふまゝ、清き海のオツンを深呼吸する時、と右舷の方に、黒き翼に白き奇
 なる紋状の模様ある、大なる胡蝶の一羽二羽、悠々として飛び交ふを
 (翻々として舞ふにあらす)見る、蝶を女性的の者、戀愛的の者、堇、菜
 の花に憧る、者としのみ想ふ我内地の青年詩人輩に、この健兒的遠征的
 なる海洋の胡蝶を、一目看せて遣りたく思ひぬ。

「見よ彼れこそは錫蘭にあらすや……」

同じく甲板を逍遙せる、一人は他を顧みつゝ、指す方に、ドンドラ岬の

燈臺、次いでガール岬、杳々として顯はれ來るは、椰子の熟する、錫蘭の島根。

(九) 古倫母寄港

古倫母は錫蘭の首府にして、ガール岬の北に横はる。港口には世界第一と云ふ絶大の防波堤、東西より海中に突出し、延長約三哩に垂なんとす、宜なり其東側の堤のみにも凡壹百萬磅を費せしと言ふや、艦て船は、赤白二基の燈臺の中央を通過して、靜かに堤内に入りぬ、こゝは流石浪穩やかなれども、外は名にし負ふ印度洋なれば、奔濤、防波堤に激し、時々翻過しては、鏘然として水晶簾を落下し來る、また古倫母の一壯觀とぞ、陸を眺むれば、禿たる低丘に散在する赤き屋瓦の朝暾に射られて、其反照は一層今日の暑さを思はしむ。

(十) タルラーラー、ボンベーヤイ

忽ち見る彼方此方の船舶の蔭より、七八隻の獨木船の後半部を潮に浸せるに、宛然彼の昔噺の槌の子の如き、四五人の土人の兒が巧に櫂を操りつゝ、タルラーラー、ボンベーヤイ、タルラーラー、ボンベーヤイ、と奇聲を發して連呼しつゝ、我船の艦の周圍を取り巻きぬ、これ我が相州の江の島に見る水潜りに同じ、試みに數個の錢を擲むで海中に投せよ、各船各個、洶々として水煙を騰げて没し、須臾にして浮び揚る時、彼等が唯一つ眞白なる其齒に、得々として幾錢かを咬へ來るを見ん、新嘉坡を發して殆んど七晝夜、行程實に千五百七十海里の永き航海に、無聊に苦みし船客等は、この面白き慰みに、知らず知らずポケットを叩く者多し。

(十一) 釋尊の靈蹟、寶石細工、錫蘭茶

此島は近世埃及の英雄アラビバシヤが左遷せられし處、尙ほ且つ釋迦牟尼が降誕の地なれば、佛陀の靈蹟甚だ多く、所謂靈鷲山を始め堂塔

伽藍各所に散在す、彼の有名なる錫蘭茶は島内至る處に蒼々たり、名物
寶石細工、象牙細工、就中金剛石に梵字を彫鏤したるものは、精巧細緻、
外人の驚嘆する所、されど初めての旅客は注意せよ、多くはこれ偽物な
るを、老獪なる黒奴商人等は、碇泊の船舶にまで來りて、巧言瞞着、遂
に沽らすんば止まず。

翌日午前十時、船はこの趣味多き島根を後に、コモリン岬を右に西北
を指し、蜒々たるゴーツ山脈に沿ふて、左舷に煙は迷ふ亞刺比亞海を迎
へつゝ、綿とペストとの本場所たる、彼の孟買ボンベイに急ぐのである。

海賊の一夜

河合 裸石

其 一

峰巒天を摩し、蜒蜿として北に斜に、缺く處峭巖あり、ルーランと云

ふ、實に北海の奇觀なり。

七月朔日、友人黒澤綱麿、三谷北星、福井江村、及び予の四名、ルー
ランに遊びて平常の渴を醫せむと、一葉船を繰す、搭載するものは白米
五升、大小の鍋各一枚、酒、菘、茶碗等なり、北星は帆掌となり、江村
は舵手となり、綱麿は擢掌となる、而して僕は即ちキャプテンたり、午
後一時、波色縹碧にして平湖の觀あり、忽焉奇怪なる音響は船の前端に
於て發せり、是れ予が出帆を報すべく石油鐘を鳴らすなり、風死して船
の行くこと海鼠の如し、行々沿岸の風光を賞し、航すること五哩強にし
て沿岸の怪巖漸く奇峭となる、ルーランの景之より幕を開く、削巖のも
と呀然として洞窟あり、其大さ二坪許、長鯨口を張りて海を呑まんとす
船は死せるが如き海を航すること六哩、夕陽水に鎔けて黄金海を渡る
が如し、晚鷗忙しく飛で洞窟に入るを見る、時にプレートン式頭腦を有せ

る北星嘆じて曰く「ア、鳥は罫に歸れど、人の子は枕する處なし」と。

都て此邊一帶の沿岸人の住するなく、殆ど絶海無人島の感あり、遙に一蒼巖の長く海に斗出せるを見る、江村曰く「彼れよ！彼れよ！！宿泊地は彼處なり、其岬を廻航せば一灣必ずあらむ、我等は其處に眠るべし」と、乃ち彼れの言に随つて針路を轉すれば、果然！！果然！！平和を包める一小灣あり、天與の宿泊地なり、此に於て無名の小灣は四個の海賊的人物の占有する處となる、船を捨て岸に上れば、東、南、北の三面數百丈の斷崖嶄然として海を睨んで立ち、たゞ日本海に面せる一方を缺くのみ。

其二

貴重なる我樂多道具を陸上し、先づ火を作らむと、波に寄せられし朽木を拾ひ來りて點火すれば、炎々たる猛焔を揚げて奇怪なる四個海賊的人物の面を照らす、擢を火上に高く交叉し、一條の荒繩を以て鍋を縛し

垂下すれば、鹽飯たちどころに成る、綱磨と予とは副食物を作らむと、丈餘の笹竹を折り來りて先端を鋭尖ならしめ、瑰奇なる岩礁に登つて、炬火を打振り海上を照せば、礁を繞つて潑として聲あり、諦視すれば是れ大魚の波間にあつて躍るなり、即ち笹鎗を撚つて突けば、尺餘のアブラコ斜に胴腹を貫かる、躍然興動き、連突須臾にして、綱磨は三尾僕は五尾を獲たり、鮮鱗潑刺、直ちに笹を割りて串となし、火に炙り大白をあげ、四個の海賊は淋漓飲啖荒熊の如し。

戲謔百出大笑すれば、三面の斷崖之に應じてケラケラと笑ふ、其音響の物凄きこと限りなし、かくて破天荒の樂しき晚餐を終り、陶然として各藁藎を被り無何有郷に入る、其狀宛も海獺の伏すに似たり、石を枕として仰で天を望めば、星斗爛として金梨地の如く、斷崖は黯として巨人の立てるが如し、海波靜かに夜の音樂を奏するの外、寂寞として何の耳

に觸るものあるなく、轉た山妖海魅の來りて予等を窺ふかと怪まる。

其三

夜の幕は開いて四邊の風光を現せしめぬ、初めて見る、高さ二百丈餘の斷崖の表は、横ざまに生えたる百合、石竹、たんばば等、爛熳として咲き誇り、其狀刺繡の屏風に異ならざるを、ア、實に自然種子散布の手腕何ぞ然く巧みなるの甚だしき。

朝食後僕發議して曰く、是より北に去る一里弱、送毛オウリガなる村あり、陸路かの村を驚かす亦興なしとせずと、衆以て快となし、一切の我樂多道具を遺棄し輕装して發す。

四個の海賊は、先づ北の方の一大障碍たる百丈餘の斷崖に猿攀す、其危険なる實に人類世界の事にあらざるなり、下れば此地有名の鬼界が濱、名を聞くだに恐ろしくも物凄き險道、丈餘の亂岩交互錯然として、立つ

もの、敬つもの、仰ぐもの、俯すもの、千態萬狀得て名狀すべからず、手を以て脚に代へて上下す、此日や風伯怒ること甚だしく、屢身を怪岩より滑落せしめて怒濤の鬼に化せんと欲す、そもこの道を何處となす、名に負ふ北海西岸隨一の濃晝ゴキビルの險なり。

かくて禽獸の行動をなすこと二時餘、漸くにして疎々たる送毛オウリガの漁村に入る、村の童娘子等が周圍に蝟集し來り、駭目凝視を久らし、低聲私語奇異なる感想を抱くもの、如し、村の小學校長を訪ひ快談數刻歸途に就く、歸れば無人の境、遺棄せしもの勿論一の失ふことあるなし。

其四

風益々暴れ怒濤鞞の聲斷崖を撼し、天真のバラダイス灣を呑まんとす、割愛に堪へずと雖も、所謂脊に腹は換ふことを得ず、衆議歸帆に決す、六枚の藁莖を綴つて帆を製し、船首に北星の大風呂敷を張つて短旗と

なし、船尾には怪しき誰やらの白木綿を飄へして長旗となし、午後二時灣を發す、枯丹岬シヤコヨシの方に針路をとり、海上に出づること二哩、矚目すれば浩たる日本海一の漁船だもなし。

其五

俄然として暴風吹え發し、狂瀾澎湃竈竈怒るかど危ぶまれ、帆は風を孕んで檣柱將に折れむとす、長さ九呎の一葉舟は鞠を蹴るが如く、忽ち高く揚りて半天に至り、忽ち傾き陥りて波よりも低く、其豪快始ど人の子が作りし形容詞を以て言ふを得ず、心神飛舞して禁すること能はず、北星、江村、得意のドラ聲を張りあげて蒙古來の詩を謳ふ、裸石亦舩をうちて之に應ず、郷の沿岸に近くに及べは、漁人濱に出で、凝視呆然たり、灣を發して二時間許にして郷ヶ港に入る。

北海の沿岸七哩

大江浩洋

孟蘭盆ボウの十六日の朝、是非歸郷せねばならぬので、宿の人の「今日は地獄の釜の蓋が開いて、亡者が浮び出る日だから陸を歩め」と止めるを聞かず、漁船に便乗して出た。

猫崎の鼻を廻れば最上の西風に、五月幟で縫つた片帆を捲いて早きこと水雷艇の如く、船頭は脚煙管くわへきせるで楫を把る。

波は立たず空は少し曇つて、涼しさ言はん方なきに、如何だ追分節なりと聞かして吳ぬかと云へば、呵々と笑つて煙管を舩ふなべりに置き、やをら唄出した、「西は……」流石は濱で評判の節廻はした、それ褒美だつと敷島數本を攫んで轉かせば、齡を取つちやアと大笑ひする。

廳おまらて小車の瀧おまら(吾村から一里、海に落つ、日本海が瀧壺だとして名高い)

近く進んだ頃、經ヶ岬の空に見えてゐた氣味の悪い雲は早や一面に擴つて薄暗く、船の速力が増して來た、一夕立來ますべいと船頭の警告、着物を脱いで苦の下に隠し、眞裸體まっぱだかになつて四望すれば、翔り來る驟雨の速力！來たぞツと帽を脱ぐ間もあらせず、周圍は忽ち億萬の水玉、脊を撲つ大礫は痛い程、壯快々々と叫んで居ると、船頭は溜水あかを漑かへて吳と云ふ、杓を把て水を漑出してゐる中、何時しか白雨軍は浦鹽方面に突進し去つた、一面に煙つたやうに見えた波の上は、さあツと晴れて行く。

間近い漁船では、今のを不知顔に綸を繰つてゐる、背後の小車の瀧は水勢俄に増して、亦壯觀！！

風がおちたのだ、櫓を漕いで吾村に着けば、早や家々に鉦の音がしてゐた。

相模灘の三十分

永田 比東

伊豆通ひの日の出丸が、午後の七時三十分に、靈岸島を出帆してから、かれこれ五時間許りたつて居る。

窓を全く閉め切つた、豚小屋同然の船室に、炭酸瓦斯が充ち満ちて、おまけに劇しく揺れるので、どうして寝てなぞ居られやう、十二三人のお客さんは、起上つて互にからだを寄り合せ、寒さに縮んで入らつしやる、寒い筈だ、一月の晦日と云へばまだ寒中だもの、樺色の中折帽子に、黒い二重廻しを着たデブくと肥つてる男、多分稻取邊の者だろう、伊豆の稻取は日本の模範村だと、口角沫を飛して談じて居る、隅の方に、僕とは斜に座つて、白い毛布を引掛て居る四十前後のおかみさん、鉢巻をして苦しさに俯向いて居るが、夫れに隣つて赤毛布を打かけ、高齋

で寝て居るのは、近衛の歩兵上等兵とは見えた。

今夜書生の乗客は實に僕一人だ、然り燈火親むべきの此頃、どうして鹿島立つ書生があらう！さらば已れは何すれば此船へ乗つた、病！實に腦を養ふ爲である、前途多事の身で此始末、思へば萬感胸に塞がる、ブラ／＼と揺れて居る船用釣ランプ、己が前途の希望の光の如く、ボンヤリとして輝いて居る、船の揺れは一際劇しくなつた様だ、寒さも一際劇しくなつた、根津の下宿屋を、あはてふためき飛出して防寒の用意を忘れた僕、船中の寒さには實に閉口、中折帽子の話もいつしか止むで、たゞ機關の音のみガチャ／＼響いて居る。

「エー眠れねえ」と呟きつゝ、ムックと起き上つたのは彼の上等兵で、

「どうもべら棒に寒うござんすな」と一寸一言會釋しつゝ、僕に煙草の火を乞うた。

「書生さん何處へ出かけますな」

「ハア伊東まで、明日の何時に伊東へ着くんでせう」と僕の間に、上等兵は一寸小首を傾けて、

「左様九時頃でせう、僕は今度除隊になつて大島の郷里に歸るのですが、矢張り伊東で下りるので、伊東でゆつくり温泉でも浴びて、それから帆前船で」

「ハ、アそれは結構ですね、あなたは後備ですか、目出たく凱旋、何にしろ萬歳です、日本の兵隊は強い」とは何の爲に云つたものか自分ながら分らない、たゞ船の揺れる許りが氣になり、「どうも揺方が、劇しくなつたではありませんか、この上劇しく揺れられちゃあ」僕は思はず弱音を吹いた。

「書生さんイクラひどく揺られたつて、たかが、相模灘では、僕は此日露

戦争で、満洲へ渡りましたが、立海灘ぢやあやられましたよ」と鼻から煙を吹出して、満洲は奉天より、鐵嶺沙河の戦まで、滔々として息もつかず語り出したが、大方の客は青菜に鹽と萎れ返り、耳を傾けては居らぬ、ただ耄碌頭巾にねんねこ半天を羽織つて、大きな雁首の煙管を啣へて居る爺さん許りは、熱心に聽いて居るやうだ。

「書生さん何時でがせう」と唐突問ふたのは鶴龜の模様の萬祝を着て居る壯俊で、多分下田わたりの漁夫だらう、漁夫のくせに青い顔をして、僕の側に横になつて居るのである。

「十二時四十分です」

船の揺れは益々甚しく、乗客は手荷物と共に、ゴロリ、ゴロリと轉げ出して、あちら、こちらには嘔吐の聲さへ始まつた、上等兵の物語もひたりと止むだ。

釣ランプは煽りに煽られて發止と許り天井にあたり、燈は消えて、眞暗になつた。

「ボーイ、ランプが消えたわい」

「ボーイ、ボーイ、オイ、オイ、」

「ランプが消えたやう」

呼ばれてカンテラさげて、デッキの上から下りて來たのは、五十許りの猩々面の毒々しい爺である。

「お客さん今夜は、悪い西が出ましてね、えらい、しけでさあ！」

「もう灘へかゝつたのかね」

「ハア三十分も前に、三崎の鼻を廻つて、灘へ出ました」と無愛想に云ひ乍ら、ランプを點して、バタ／＼と甲板の方へと去つて仕舞つた。

瞬一瞬、船の揺れは益々甚しく、乗客はまるで、芋の如くに、揉みに

揉まれて七顛八倒、腸を搾つて呻く苦悶の聲、嘔吐の聲、光景まるで地獄である、活地獄である、悪臭鼻を衝いて胸は痛く、頭は重く、其苦しさ、よろめく足で梯子を上り、甲板に出るとたんに、颯と頬をかすめて吹く一陣の西風、氷の刃で身を切られるやうである、帆柱の下迄甲板を匍匐つて、わななく腕で帆柱を抱き、風を後に蹲まれば、慘憺たる哉、海は荒れに荒れて、船はまるで木の葉の様に、浪に推上げられては萬丈の山に登り、引下げられては千仞の谷に落ち、右に傾き、左に傾き、帆柱は浪につきささうである。

船子等は、周章てふためき、前よ後よ、と甲板を走つて居る。
遠く東の方に見ゆる一場の青光、あれは城ヶ島の燈臺か。

極北の海

齋藤觀子

今極北の海は、半歳の夜を辭して恰も新なる半歳の光明に接せむとす、夜は限りなき夜と雖も、丑滿の頃は又自ら丑滿の時を示せり、足下に眠れるロシアも、今は夜を守る拍子木に枕を高くして、暖き雪の懷にうまいしつる頃ならむ、左の方波光かすかに水に吐いて、濁れる如き空の灰色は、やがて北米の原野に暮る、日の光にて、ロッキイの火山に鐵を延ぶる槌の音も冰りて聞ゆ。

靜かにうねりを傳ふ北氷洋は、暗として死を堪え、鐵器に浮べる繭の如き氷塊は、中に靈火のたぎるが如き音をなして出沒し、琅々として碎くる冰山は、水に玉屑を散じて流る、餘響遠く雲をゆるがして天に叫び、斷雲降つて水に解くるかと怪む。

寂寞として眠れる天地に氣は白う冰り、寒風重き極北の海の面は、玄穹の空と結んで四圍遠く、其苦しき夜の喘ぎは、刻々として沈み行く瀕

死の人の息に似て、夜は永遠の宮居の戸に迫り、鞆鞆とて先きを争ひ行く萬頃の波の音も、夢寐に浮ぶ絲竹の音にのみ聞く、雲、冰りて水に浮べるか、水、雲に入りて漲れるか、重う垂れたる雲の足並遲きに、寒風矢の如く吹き來つては、蜂窩の如く穿つて去り、圓環波上の夜は、黑白の色を呑んで青藍の水に浮び、水は冰山に結んで音なく、忽ち大象の水を行くが如く一朵の白雲となりて走る中に、油然たる者雪崩れ來つては、渾沌として太古の音響に鳴る。

不圖足下に浮ぶ雲の床紅く、遠く紫紺の戸張を排ふ白羊の宮の姫が天樂に、波上千里燦爛たる雪玉の藻連り、溶々たる波に金流れ、閃々として我日の神出で給ふ、ア、渾沌たる半歳の夜は明けぬ、すがすがしき曉の氣は重き雲を排して開け、晨に薫する満潮の流は、今一縷の光を吸ひ得てうそぶき、奇しき爛々たる眼ざしは永久の藍の色を湛えて輝き、限りなき生命に満てる北極の海の朝は、精氣満々、やがて息する様にあへ

ぎ初めぬ。

土佐の鯉

畠中白紅

松がある、獨り沼の横手は木立が暗い、常夜燈の下に手洗石がある。月がでた、雲脚が速い、書割の浮津の港に漁火がちらりほら。

「若けえの、一寸待つて呉んな」、豆絞りの頬冠りを鼻先でひねつた胸毛の兄弟分が、悠然と懷手で仰しやりさうな二番目物、南向の辨天堂は海に近う。

墨繪を溶した女夫岩は濤聲を隔て、三町遙か、荒浪に碎けた月影を掬ひ乍ら不斷の腰蓑をまとつて、澀々の裡に滅没する。

夢のやうな姫小松が一群玉藻の香に煙たさう、磯曲を一文字ゆらく

と流れる月光は、既う自分の身を濡してぞつと胴裏に空を仰ぐと、ふはりと柔かい雪が白う纏れて東の方へ、宮が熱海で泣いたのもこんな晩であつたかしら。

自分は雑囊から湯沸を出して、車井戸に手をかける、今夕食の米を磨ぐので。

釣瓶がどぼん、あたりはひつそり。

あッ、ほろ／＼と米粒が青笹を這べつて水苔の上へ瑠璃の玉を綴る。

折ふし夜鴉が、かあと吃驚松(松の名)の梢で夜はもう七時、湯沸の下へ火を焚きつけた。

室戸の燈臺がびか／＼と明るくなつてはたと消えると、千鳥が何處かで呼ぶ。

好い月夜で、こんな晩に蝟の奴め瓜を盗みに濱へ上るだろう。

あゝさう、この松魚！夕景浮津の濱で得た潑刺の一物は、巻菰を透して紫紺の脊筋があり／＼と。

早速湯沸しを下した、飯は出来てをる。

松の落葉を集めて火をうつす、白い煙がすうと細うゆれて月は臙ろ、影が淡う砂に曳て。

自分は今土佐名物松魚の「たゝき」をこしらへるのだ。隠しをさぐつて一挺の快刃に、肴は片身に手際好く卸されて早や火の上、萩の枝に支へられて焙られて居る。血を漲らした真紅の肉筋はめき／＼と躍つて、火焰にはじける脂肪の香が鼻を突く、それをすぐ火から下して、焼肉へ小刻に刀を入れる。火の通らぬ内部の肉は、紅珊瑚の色が美事渦巻いて、それに一顆の柚を割つて落すと、雅人が呼ぶ「土佐の海」所謂松魚のたゝきができる(普通は稻藁若しくは茅で焙るぞだう)。

自分は今し土州九十九灘の月下獨り細波珊瑚の聲に、手製の萩箸で「土佐の海」の淡味をほしひまゝにしてゐるが、何だか勿體ない様。先年手結で琴雨と松魚釣に行つて、鯉の茶漬を食つた時を漫ろ思ひ出しては、蒼茫暮靄の中に浮ぶあの室戸岬燈光、「僕が後半生を過す所はこゝだ」と曰つた琴雨の身が羨しくつてならぬ。

あゝ實に絶景々々、平波の浦月は愈々澄んで、瑠璃一碧水天相接する所、山影空に懸るは行當の岬、一曲一灣練布を曳いた長汀洋々の漣波は江村の夢を抱いて、雁塞の星に耳語さ、女夫岩あたりを信天翁か白い翼の鳥が靄に消えさう。

疲れた自分は辨天様と相談の上、青鞋一痕扇を開て、一夜の宿を堂宇に拜借して、一枚の毛布に身をくるまると夢は混迷の無我境。

突然雜囊の米を噛ぢる老鼠の聲に目を醒まし、格子を透して外を窺ふ

と一痕の残月はいつか江村の松に落ちて、出潮待つ珊瑚取りの海士の聲がよく聞える。

「忍路高島及びもないがせめて歌棄磯屋まで」、すうと磯臭い潮風が吹くと、べたり氣味悪う頬へ何だかさほる、落葉かと思つて手にすると、墨の香床しう「未の歳女」と書いた千社札、磯の乙女も戀はある、自分は亦夢うつゝ。

相模灘越え

永井嘯月

伊豆の大島に、神の道傳へんは如何にと。宣教師なる夫妻は我に謀れり、我は通辯として雇はれたる身の、素より布教地の選擇權などは持たぬなれど、只年の十月は海上餘り穩かならぬ由をのみ答へぬ。

ガリラヤ湖を治め給ひし神は、と夫なるが云へば。今も我儕を護り給

ふよ。と妻なるが和す。

談は遂に纏りて。彌々我儕一行三人。靈岸島より伊豆通ひの汽船天龍丸に乗る。

未だ明け切らぬ竹芝の浦には、漁火にやあらん、點々曉の靄を焼く影紅に、泊り船の櫓そゝり立つ林のようにて、花の大江戸もひつそりと冬枯の様なり。

羽根田の鼻にかゝる時、空漸く明け放れたれども、日未だ登らず、唯一抹、薔薇色の光、上總かと思はるゝあたりに棚引きて、先つ今日の好日和なるを告げぬ。

横濱を右手に見て過ぐる頃、上總の山くつきりと浮き出て、大なる深紅の半圓、突と其の頂を出でたり、日出でたり、と見れば、海港檢疫船の附近、大小六隻の汽船、孰れも一樣に、船尾に國旗を揚げ初めぬ、

見れば、英あり、獨あり、最も大なるは太平洋汽船會社の船にて、我儕が渡來の節乗船したりし、チャイナ號なるべし、と宣教師は云ふ。

觀音岬をこゆれば、潮流稍急に、船少しく搖ぎ初めぬ、逸早く金盃を呼ぶ老媪、身だしなみ忘れて寢そべる娘、海は漸く人間の試験を初めたるが如し。

浦賀に入りたるは十時を少し過ぎたる頃なり。降りる客もなければ、乗る者もなく、只少しの貨物を積込みたるのみにて、船は懸て纜を解きたり、灣口の右岸に大なる碑あるを認めて、ペルリの記念碑にてもや、と宣教師は問ひぬ、否とよ、彼は昔時罪人の斬首せられし場所にて彼の碑を俗に首斬り石と云ふなり。と我は同乗の一人が教うる儘を答ふ。オ、とのみ叫びて共に眼を瞑りたる宣教師夫妻は如何なる事をか追想し始めたるらん、我は其を聞かんと思はず、左舷の窓近く寄りて、漸く

後退り行く總房の山を、飽かず眺め入りけり。

三崎に一寸止りて後は、名にし負ふ相模灘、此を横切りて、熱海に入る迄は最早船は止まらじ、波や騒がん、風や起らん、用意こそ肝要なれ、と銘々思ひくゝに座を占めて、只管海の穩かならんことを祈れり。

中に、宣教師夫妻は、切りに讚美歌唱へてありしが、忽ち我に向ひて、一席の説教を試むべければ通辯し呉れよと夫なるが云ひ出でぬ、いと易き事ながら今は用なき事なるべし、斯ばかり人々の船酔ひして苦しめるを、いかでか耳に入るべきや、と我の答へ了らぬを、否々イエスの波立騒ぐ海を静めて船中に道を説き給ひたれば我儕も其の聲に倣ふべきなり、とばかりに早くも教を説き初めぬ。

珍らしき異人の寢言、洩さず聞取りて家土産の語り草にせばや、となるべしチヨン鬚老爺先づ起き直りぬ、金盞を杖に老媪も半ば體を起しぬ、

娘、若者、同乗の二十人ばかり皆一同に我儕に視線を集めぬ。

謹聽の體に、力得たる宣教師は、勵聲一番、將に神の偉力を説かんとする時、其聲に呼び寄せられたらんが如く、大浪一つ舷を打つて過ぐれば、船はゆらくと揺り上げられ揺り下されて、不意を喰ひたる一同は鉢合せするあり、轉ぶあり、鹽振りかけられたる蛭の如く、孰れも萎れ返つて船底にしがみつさぬ。

海を生命の日本人、如何なれば斯く海に弱さぞ、と宣教師は、浪に折られたる舌鋒を立て直して、此度は我に衝きかゝりぬ、日本人必ずしも海に弱からず、請ふ我を見よ、此人々は生憎海馴れぬ者のみなるべし、と我が答はいと苦しかりけり。

風漸く強まりて、浪益々高し、天龍丸はあはれや僅に十餘噸の小さき體を幾度か浪に蹴られて、幾度かよるめさぬ、乗客一同の益々弱り行く

に、宣教師も遂に説教の望を捨て、聖書を枕に、夫妻にエデンの園に遊ぶべく眠りに入りたり。

我は元來海を愛す、曾て孤船に激浪を開いて、伊東より初島に冒險を試みたりし快などを追想しながら、相模の海の底深く思ひ入りし時、忽然右舷に近く落雷の如き響あり、何事ぞ、と小窓を押して見れば、數千の白馬競ひ駆くる果に、大磯あたりなるべし、老松と人家と參差たるを模糊の中に眺むる外、何物もあるなし、窓を閉ちて座に復る、須臾にして又、今度は響と共に黑影の窓を壓して去るを認む、再び立ちて窓を排せば又一物を認めず、不審の眉を蹙めながら更に窓を閉ちんとする時、屹として巨巖浪に聳へぬ、と見れば、一巖、更に一巖、累々たる巨巖は我儕が船の行く手に當つて横はりぬ、一進更に一進、嶮又嶮、今にして舵を轉せずんば天龍丸は瞬時にして坐礁の厄に遭ふは必定、よし我船長

に警告せん、と立ち上らんとする時遅く彼の時早し、一巖忽ち躍つて天に冲するよと見れば、更に一巖、又一巖、有りと見つる十個許の巨巖悉く躍つて、再び海に入る時、百雷の一時に落ちたらん如き響、耳も聳せよとばかりに起りぬ、即ち知る、先の響も是にして、之は即ち群をなせる海豚の我儕が船と競走途次の道草なるを、我は此の激浪に御して悠々自適海若の怒を嘲る海豚の大を羨み、精力の有らん限りを盡して造り得たる船の脆くも怒濤に弄ばるゝを見て人間の小なるを嘆じぬ。

再度の壯觀を希望して、窓を閉さず眺めたる我は、不幸にして遂に又巨巖の舞踏を見るを得ざりしかども、我は更に面白き見せ物を無料にして覗きぬ、海豚の踊を角力取の土俵人と云ふべくば、飛魚の舞は正に少年の劔舞なるべし。

天龍丸は大浪小波に大動小搖、時に片車の空に鳴ることすらあるを、

海を天地の魚なればとて、如何にも飛魚の壯快なるかな、忽として波を出て純白の双翼に日光を載せて行くこと數十間忽として又波に没す、更に他の飛魚あり、翳す扇の双翼に波を掠めて高く低く舞ひ了つて靜に波に入る、突として振翳す白刃、肅として拱く腕、肩を張り思に沈む、我は紙袋より一つ／＼つまみ出すビュケットに舌鼓打ちつゝ、此の海上の美少年の劔舞に見惚れて、浪を生命なる海國青年の陸上の劔舞の餘りに活氣なきことも忘れ果てたる間に、天龍丸喘ぎながらも其の任を盡して、長鳴の汽笛三聲、錨を熱海の濱近う卸しぬ、時既に日暮。

我儕三人、今霄熱海の旅館に一夜を托しぬ。

濤聲風語、夢に海豚に乗つて、飛魚を追ふを見る。

出羽の海

大江浩洋

其一

我が青雲丸の練締糟を搭載して函館を出帆したのが五月六日の朝、今日は丁度其四日目である。

日和は續く、風は好し、今も十八反の白帆を張切れる程捲いて、百萬疊の疊の如き青海原を駛てゐるので。

右手は森々として際涯も無く、遙に紺碧の水と空と相合ふ邊迄、一帆の影一鳥の泛べるも見へぬ。

左手は遠く朦に煙る羽前羽後の長汀曲浦。

目近く一隻の汽船が煤煙を長く曳いて、滑るやうに行く、其前方向からたつた一艘の白帆が、我船より五六湮遅れて追附いて來るのを「今朝酒田を出帆したのであらう」と眺めてゐると、白帆は晴によく、雨によく曇にもよし、去れど汽船は怒濤の裡に見るべく最もよしなどの感想が浮ぶ。

其二

暴風さへ來ねば港に入るまでは水夫は實に暇なもの、九人の乗組員が一時間交代に楫を把るのと、舳で針路を觀るだけの仕事で、後は眠るも唄ふも饒舌も勝手である。

今し晝餉を濟した若者五六人は甲板に上り、帆陰に腹這ひ、函館の女郎買話を始めて笑てゐる、處へ炊夫(船の飯を炊ぐ少年)が惶忽しく上り來て「海獺が居る! 海獺が居る!」と叫むだ、すると一人が「北海に海獺の居るのが珍しいかい」と云へば「海獺の寝流れ三日は醒ぬ」と傍から笑ふものもある、が炊夫は熱心に「今茶碗洗ひに楫の間に出て、水汲みかけたら、海獺が楫の間の下に這上て寝て居るんだ、來て見なつせい」と云ふと、一同も徒然の折からバタ／＼と下りて來た、と辰公と呼ぶ若者が、麻の太繩を出して罌を作り、老船長の止めるもさかず、工夫を凝らして甘

くそれを海獺の頸に掛けた、さア引けつと總掛り、ブネー／＼と奇妙な聲で吼るやつを、エンヤラヤーの掛聲で、遂に甲板に引づり揚げ、艦柱に括り附けた。

すると又辰公が「海獺の髭は黒焼にして嚙むと痲病の妙藥だ、抜いてやれ」と云出したので、船長迄も興に入り、一同大騒ぎ、辰公は釘拔を持出して、奇聲に吼附くのも怖れず、數本を引抜いた、さア吼る、又數本抜く、益々吼る、三十分も経ぬに長いのも短いのも殆ど抜いてしまつた、と見ると海獺先生の髭無し面の其滑稽なこと、何とも形容の出來ぬ可笑しさに、一同腹を抱へて笑ひ轉げた。

船長の「もう逃してやれ」と云ふ挨拶に、繩を切り放せば、先生狼狽て、舷側から轉び落ちて、其大杓子の如き水掻を以て遂に没し去つた。

あゝこんな面白い航海をするのも日和の良いお蔭だ、とは船長の述懐。

其三

辰が唄ひ出した自慢の博多節に夢破られて、甲板に出づれば、今宵（六日目）は浪少々高く、風強きに帆は七合位に下げられてゐるに、早きこと汽船の如くに軽快である。

右舷の垣に凭つて望めば、迷濛たる浪路の末弦月高く懸りて、金波流れ、舳に碎ける銀波の美しさ、宛然船は島に化して、龍宮指して翔つてゐるやうだ。

未だ霽なれば下りて再び床に入れど、兩舷を撲つ浪の音は枕に迫つて熟睡を妨ぐるに、夢うつゝの境を辿つてゐると、突如甲板上、佐渡が見える！佐渡が見える！と云ふ聲の聞ゆるに、匆ね起きて走り出れば、月光暗淡將に波上に消えんとし、高くなつた浪の彼方に浮べる佐渡が島根の眠れる山影は夢のやう。

仰げば一道の銀河隠々として流れ、満天の星は低く垂れて瞬いてゐる。時針は丁度三時を指して、船は未、申を指して駛てゐる。

月眉島畔

小松萬石洞

一行は税關前の波止場に立つて大聲に朝鮮船ペイを呼んだ。元寇來襲の石版繪に見るやうな代赭と胡粉とで塗り潰した朝鮮式の扁舟が聲に應じて来る。舟子二人自分等は舟が着くや否や長端五六本の針竿と荅笮びくと通草製の手籠とを投げ込んで。先づ妹、父、僕と順序に乗り込む扁舟ザンパンの胴には洋犬かめの小屋のやうな彼等な住み家！がある、この薄暗い南日蟲ヒンテでも居さうな小屋が即彼等のホームで一枚のアンペラに破れ釜、夕顔で造つた水漕、大茶碗一個財産はこれ切り簡易生活レンブライフの上乗だ。

舟は月尾島に沿うて沖に進む、砲彈に模た計潮標かたどと珊瑚島の間に来る

と殆ど谿流の如き急潮——この港の潮の満干の差の甚だしいといふ事は地文學書の後頁を披た人の熟知して居る事だ。

好い程の所へ錨を捨てさせて綸を垂れる、見渡せば月尾島は海鼠の様な影を水に浸して居る其影の鼻ッ端が自分等の舟の舳に當つてゐる。

この記念多き月尾島は今已に満島數千本の櫻の若木を植ゑ付けてゐる、今後十年の春を想ふ可しである。月尾島は今は多く月眉島と書かれて居る衆の上からいふも妥當な文字である。

其處此處の離れ島に潮満ち來る間を海藻抄る紅衣の童子や海底から石炭を拾ふて居る船頭が例の悲哀な亡國風な謠を謳ふて居る自分は常もこの哀調を聴く毎に這箇亡國の高麗民族の爲めに暗涙を催されるのである。さる程に綸鈴切りに鳴つて釣れるはくく巨口細鱗、松江のそれかと思はれて大鱸、黒鯛、穴子、めばる。尺、二尺、三尺に及ぶものが海のお魚と

いつたら恐く金花糖の鯛をぶら提げたことの外は無味妹の竿にも上る。流石の舟子も大喜びで忠實に針を抜いては驟に投げ入れる御役目を勤めて居たが俄に「大人苦痛く」と泣聲を出して手を震はす、黒鯛の鰭でやられたのだ。當意即妙妹が紙入からセンくを出して與へると莞爾として「好々もう痛い無い」靈藥の効灼然なものだ苦笑せざるを得ない。只見れば已に潮はひきつゝある、陸から十數町は最う洲になつて仕舞つた。沖の方から意勢よく汽笛を鳴らして入港て來た商船の檣旗は二ツ引の日本郵船である、内地からの好信は無いかしら。

肥後の海岸

大庭雪岳

四月四日、五時に起床し身仕度に一時間を費し、假寓福陵の荒津山下を出づ。

朗空暖風、紅霞十里、右に霞の愛宕山、左に萬頃の田疇を眺めて姪濱を
 すぎ一帯の松林に入る。この地を壹岐の松原といふ、滿地の軟砂に寸埃
 無く、矚目の松樹千株萬株、狼籍聳立、而も老いたる木振りの間、微か
 に潮光のひらめきて旅の興を深からしむ。加ふるに輕風海を出でて長梢
 の頂をわたり一時にざんざめきて笙簧の樂をなす。聞く、この地、往時、
 神功皇后征韓の時、來りて松枝を逆植し「事なく異國を平げ歸らんには
 この松、生きて立てよ」と誓はせ給ひしとぞ。後、この松、翠針を出し
 漸次嫩葉を増して遂に今日の松原をなす、古老は四五十年前迄松とよぶ
 ものありしと傳ふ。今、林中に壹岐神社あり、壹岐眞直根子を祭る。
 相殿熊野大神を配祀す。又、彼の元車、海を覆ふて來りし時、附近亦そ
 の戰場となり、幾萬の武夫、重義輕身、流血伏屍、以て當年の國患を除
 きたるの地、英魂長へに北海を睨みて絶えず嘯潮の悲歌を奏す。道はこ

れより海に沿ふて坦なり。左、雷山の支脈、蜿蜒として翠色霞に包まれ
 淡く薄く、右、澄める海潮、漫々として脚下に奇石怪岩を見せ、白帆隱
 見して歩みは心地よく運ばれ、今宿をすぎ前原を経て、更らに綠麥黃菜
 の間を縫ふて牛歩筑紫富士をながめつゝ、深江に入る。

この地の西南數町ならずして鎮懐石八幡宮あり、脱鞋して此所に遊ぶ、
 社は山をひかへ、海に臨み、高き石疊の上に立ちて頗ぶる眺望に富む。傳
 へいふ、神功、征韓の時、祈りて石を腰帶にし、以て臨月の期をのばし
 歸りて應神帝を生む、この祠はその石を奉祀するの靈蹟なりと。

この夜、宿する所を泉屋といふ。

翌日、未明に結束して福井、吉井をすぎ、道は數年前に開かれたる新街
 道にして、浮岳の支脈の海に迫まりたる間に敷かる。脚下、斷崖にして
 青波漫々、又茫々、遠く翠黛の一刷毛はきたる如く望むは松浦の半島、

糸島郡の佛崎との間、姫島を浮ぶ、遙かに水天髣髴の間、雲耶山耶、淡く夢の如きは壹岐の狐島、近く倭松をかざせるは筑の葉島、青螺盤上點々碁布するは肥の五島、應接違なくして一小半島の頸を横ざれば鹿家シカガの海岸となる。汀邊の青松、波上の白帆、加ふるに崖下に迸出するの岩清水、何づれか旅の薬ならざる、神斧鬼鑿、天然の景は脚の勞を忘れしめて浮岳の麓をめぐる。ここに玉島川の流れあり。わたれば濱崎の町となる。余は左折して川に沿ふこと凡そ半里、玉島神社に詣づ。郷社にして息長足姫命を祭る、皇后垂綸の地として普ねく人口に膾炙せるの所。余は、これより更らに踵を濱崎にかへして虹の松原に入り、左、領巾振山を仰ぎて松浦佐用姫の昔を偲びつゝ、唐津の町に進む。

姫島

鈴木翠嶼

是れも何かの因縁で、今度鞍替させられたは復たしても離れ島、恰も國東半島目上の瘤、周圍四里幾丁戸數は千と申す處、併し燈臺のあるは東端の一角、島の貴府本村と云ふの迄は、山を四ツ五ツ越して一里半も行かねばならぬ島中極の田舎。

此島に来て先づ第一に我を訝からしたは、女の皆が色白く且つ眼鼻の整つて居て、所謂別嬪の多いこと、斯く申さば直ぐ『貴様は多年津々浦々を流浪して女を見る眼玉が瘦せて了つたんだい、獨身でけつかるから碌でもない事ばかり考へてやがる、助平野郎が』と拳を固めらるゝ方もあられうが、でもこれは事實、而も水が良しい譯でなし、薯を常食として毎日百姓して居ながら斯くの次第、だから不思議、そこが姫島、成程！其れにしては随分大袈裟な名稱よと思つて居たが、之れには聊か仔細のあること。

一日燈臺を觀に來た村の古老を人懐かしき境遇の我は種々款待し、そして思はずも此島に就て、憐れにも亦美しい左の戀物語を聞いた。

後陽成帝の頃、豊後内山と云ふ處の長者の娘に芳紀十八、名は玉代姫と云ふ絶世の美人があつた、然るに如何した機會か都のさる公達が或時これを垣間見て、深くも其面影の心に染み戀々の情の堪へ難く、遂に都を振り捨て、唯獨り、遙々と内山の郷に尋入り、身分を深く匿して長者の家の下僕となり棲込んだ、容姿秀麗固より他の芋堀胤と比すべくもないので、松と松との深緑美男美女は何時か割りなき仲となつた。

既にして父なる長者の知る處となり、家の法度を破り、剩へ下男と通ずる下劣至極の奴、末の例牒ミセンメ遠島を申附くとあつて、二百兩の封金を投げ與へ二人は此島に流さるゝ事となつた、姫は泣いた、下男の公

達は之を喜んだ、此時姫の犠牲とも云ふべく、何處の果迄もと従つた孰れも花の如き三人の侍女があつた、一行五人は此處に捨てられて、鐵漿山カチヤマと云ふに新家庭を造り、配所の月も嬉しく瞻めて、暫くは楽しい生活を續けた。

後に至つて己れの戀人は世にも高貴の公達なりしことを知つて、姫は今更賤しき身の血を交へたを酷く悔悟し、或朝早く海に投じて可惜美玉を龍宮の庭に棄てた、公達の悲歎一通りならず、是非なく後懇ろに弔つて之れは泣くゝ都へ還つて了つた、そして殘された侍女等は夫れゝ島人に嫁ぎ、皆長壽してこゝに世を終つたと云ふ、今猶稻積と云ふにある比賣古曾神社は當時の玉代姫を祀つたのだと。

何と云ふ憐れに美しい不文の歴史ではあるまいか、我は息を殺して、非常の趣味を以て此一場の譚を聽了し、而して此島には昔ながらの（侍女

等の美人系の傳へられてあることも、姫島と云ふ優しい名の起因も茲に始めて明了したのである。

月夜の清見瀉

金 紫 潮

夕餉終りし後、我が宿れる興津東海ホテルの樓頭に立つて海上の明月を眺めぬ、前栽の繁みの間、平屋建の離座敷の屋根の上に、月影白う落ちて我が佇める欄干越えて、綺麗に拭かれたる椽板を浸し、白き帛曳きたらんさまなり。

樓を下り、門を出で、細き小徑の奥を溝に沿ふて海邊へと出でぬ、軟かさ砂路ざくりくと踏むに聲あり、左手には磯馴松の林、小暗さが連りつ、荒濤、巖に激して高く初更の浦和に響き渡る。

干瀉となれる渚には漁舟幾十艘、陸に引揚げられて立並び、綱や、板や

魚籃や、狼藉として四邊の砂上に散亂し、折から鱗形の薄雲に隠る、月の光に仄白さが、宛がら破船の跡のやう、荒寥として物寂し。

渚より掛けて沖の方百間ばかりの距離に、さまざまの奇状せる黒き巨巖、宛がら百千の怪獣の月光を浴びて波間に游泳ぎ回りつ、あるかのやう、巖より巖に棧橋懸け渡し、最も大きやかなる三個の巖の上には、四隅に柱を建て、屋根張りたるは、夏の頃、浴客の憩ふに造りしものと思はれぬ、今しも神無月の初なれば浦吹く潮風に葭簀張の屋根は、半ば吹き攪はれ、處々に残れる茅萱の屑の濱風に閃めくも哀れなり、我はその椽板に腰打卸し、袂を探りて寒煙草取出し、火を燧て煙を燻らしぬ、振返れば、後に聳ゆる清見寺の峻しき峰も、その麓に連る興津の町も、一面に濃き幕に鎖されつ、唯だ墨繪の景色のやうに臙なり、磯臭き濱風身に泌みて長汀曲浦見渡す限り人の隻影だも眸に入らざりき、月は今しも箱根の左肩

より差異りて伊豆相摸の遠山が影彷彿として夢の如く、月中に微かに見られぬ。遙かに沖の方より競ふて寄せ来る荒濤は、わが佇める巨巖の四邊を包圍し、恐ろしき吶喊の叫びを揚げつ、白沫は碎くる花吹雪か、卵の花の散る影か、稍々隔れる沖は月に淡く、近きは真白く綾の波を漾はし、我は一心に見詰むる間に宛がら、今宵しも天涯の離れ小島の上に獨り放たれたらんやう、寂しくも心細き感想の頻に胸に涌くを覺えぬ。

耳歛て、聽けば、夜濤萬古、宇宙の何の神秘をや歌はんとすらむ、その音響の裡に一種の動靜律の含まれつゝあるを聽取しぬ、ドーウ(高)ドーウ(低)ドーウ(最高音)。最高音は寄せて磯に碎くる時、或は巖角に觸れて高く躍る刹那に起る、此方にも彼方にも絶えず遠近の渚に起る濤の響の中に一際高く響き渡りぬ。

わが立てる巖は形巨象の背の如く小高く、潮を浴び濡色を帯びて黒きが、月影映りて青く輝きぬ、鹹水の爲めに侵蝕せられてならむ、處々馬蹄大の圓き穴幾つともなく斑紋をなせり。

海上遙かに見渡せば月箱根の上に掛り、東の空のみ冷やかに白き光漲り渡り、漫々たる海潮の上にX形に射光落ちて、浪、白銀の色に輝き渡りぬ、潮の間斷なく、高まり、落ち、騰り回むに隨ひて、萬頃白銀を熔せる波は大らねりにうねりぬ。巖よりかけ、前面半圓形の圏内のみ、自ら海の大部分も背後の陸も朦朧として薄暗く、紗の如き靄に鎖されぬ。一丁とは隔らぬ暗黒なる清見寺山の下に當りて、突如赤火團現はれ空を西へと飛ぶ、我胸は轟きつ、興津の町にて火を失したるには非ずやと想ひぬ。瞳を凝らして見詰れば、紅の火團は折々ぱつと炎を揚げつ、興津全市の上を掠め、闇を縫ふて西を指して飛び去りぬ、何の音響も聞かざりしかど、響はわが四邊に高く吼ゆる海濤の音に掻き消されやしけむ。少

時の後、我れその西行の汽車なりしに心付き、獨失笑しぬ。

月の差異るに随ひ潮満ちて波準高まり、今迄乾ける巖も洶然と躍る荒波を浴びて一個々々潮に隠れ、波の響も數分前よりは彌や高く轟き渡りぬ。われは無限勢力を蓄ふる海洋の沖の方より、刻一刻、危険の我身に迫りつゝありて、そを心附かずあるには非ずやと想ひ、そる身中の寒くなるを覺えぬ。

巖に架け渡したる棧橋は潮に洗はれ、滑らかに濕はひぬ。最前渡りし時は、潮涸れて一面干潟となり黒き巖根數個、濡れたる砂の上に横はりつゝありしも、今はみな泡立つ潮に包まれ、波に浸されぬ。

四邊の景色は折々薄暗う曇りゆき、また時々雪の如く白く輝きぬ、月は今しも我が前額と六十度ばかりの角度を作りて差異り、鱗形に大空に漲る織雲折々月を翳するなりき。

見渡す限り蒼茫として我より外に人の隻影を見ざりしが、十間とは隔らぬ彼方の岩蔭に今まで見ざりし黒き物の潜めるを認めぬ、怪しと見詰むれば黒き影は搖き出し、一步々々我に向て進み來りぬ。我は少しく恐怖に近き不快の念の動くを覺えしが、彼は不意に踵を回らして右手なる松林の中に姿を隠しぬ。

顧みれば、清見寺山の麓に、二階建の宏壯なる建物、客なきホテルの樓上、東の端の一間に、燈の影の閃々と搖ぐは今宵しも我が疲れし體を托せる旅寢の一間と思へば何となく懐かしき心地のせられぬ。

室に立歸り障子推開きて眺むれば怒りたる荒浪、人を脅かすかの如く、徒らに巖の群を擣つて高く叫び、薄絹の靄の底に時々白き泡の雪と碎くるが目に入りぬ。

左手に當り、清水、江尻かと思はるゝ邊、夜山の輪廓微かに消え〜に、

海に突出でたる薄暗き沖に、その色赤く螢火のやうなるが兩點三點、ぱつと燃え立ち波を焼きて閃めき、やがて痕なく消ゆくは、沖に漁る蟹の漁火にや。

濱千鳥カ、ツツーくと押し附けられたやうな、哀れを帯んだ寂しき聲調にて鳴き渡りぬ。樓上樓下百餘の客間も、折から一人の旅客なく、我れは眺望最もよき十疊の一室を縦に占領し、風流は寒きものぞと瘖我慢の戸を繰り開けさせ、月に輝く海原を一目に、肴は名にし負ふ興津鯛の刺身とフライ、外に二種三種、エビスビール半だす、是で用なければ勝手に寝て呉れと樓婢を逐ひ歸し、夜もすがら月を侶に獨頻りに大盃を呷りぬ。

海草終

附録

百子姫

川上眉山

海近き松原の中、松深き方に隠れて、姫と我ただ二人ありき。聞こゆるは遠の舟歌、濱撫子の花あるあたり、美しき真砂の上に、豆蟹の這ひ度る見ゆ。玉簾の奥なる御なれば、恁かる事幾度かあらん。松風の彼方は浮世、浮世なる人の子二人、忘れては又疑ひぬ。星合の其姫君か、此處はそも天の河原か、まどひ来て處も知らず、やや暫し言葉もなかりき。君と雲を隔つるにわらず、しかも我等は相逢ふ事を得ず、年に一たび、去歳は春、一昨年は冬、今年夏なるこの一時を、秋ならなくに七夕の逢瀬とばかり、哀れともいふ人なくて只二人打ち寄り居たる。姫の眼には涙あ

り君聞けや。火にも焚かるべし、水にも沈むべし、この心をいかにすべき。今年も恸くて過ぎたらんに、われ將た如何にして世に得堪ふべしや。

われは口を開きぬ。ただ戦はんのみ。

姫、君ありと思ふ心の強みにも、何とて恸くは打ち泣かるらん、あゝ、君と共にいつこにも行かん。君は諾ひたまひなんや。われ、あな、あはれ君はのがれたまはんとや。姫は頭を掉りぬ。聲は強かりき。さならんや。さならんや。

さし俯向ける頂の力無げなるに、葉守りの日もなほ厳しげに見ゆ。風は輕羅を吹きて身の衰へをあらはにしぬ。瘡せたまへるよとのみ、暫し打ち目成れば血も涸れ侍らん、佛には櫻の花をと、打ち笑む影の泣けるよりも淋し。

いつしかに相語りぬ。一時に千歳を掛けて言の葉の餘るを恨む、ときめ

ける心のただち常磐なる松に忘れて、人もなき濱に忘れて、世を知らぬ岩に真砂に、飛ぶ鳥の影に忘れて、黒髪の香を打つほどは、眉が根の匂へるほどは、誰をしも知る人にせむ、君が名は我が唇に君が聲などいと繁き。あゝ、君が面の輝ける露の間をこそ望み得たりしが。

何事ぞ、姫が名の彼方に聞こゆ。松風の吹くと覺えて、白波のかへすと見れば、姫ははやあらざりき。

歩して松を出づれば海いと近し。島山に人の家見ゆ。磯が根に人の船見ゆ。渚漕ぐ人の子も見ゆ。こゝも亦人の世なれば、別れでや有らるべきや。青柳の靡けるあたり、道の邊を振りさけ見れば、影さへもはや見えずなりぬる。砂の上に文字ありて、只、松の雫とのみ。あゝ、袂の色如何に深かりしよ。

白帆に寄する歌

兒玉花外

あゝ、大波のうねくや、
旭日を孕む金帆は
七月、佐久の白百合の
雲吹く風に揺る如し。

聞け、赤銅の裸男、
浪も鎮まる火の言、
見よ、巖角に手を舞はし
お、長髪の人立てり。

驚く勿れ、漁夫の子ら、
大き丸帆にわが怒
小さ片帆にわが愁
載せて駛けれや茫千里。

いかに其船、釣絲に
鯉、積んでは百石よ
高さ、美しを劍に獲む、
古今ぞ抜ける海賊ぞ。

陸在るきはみ、氷島や
舳の前に崩れ伏し、
魔帆むく影に諸々の
船は逃るる鱚かな。

巖にたばしる熱血に
波も躍りて今急に、
行方は知らじ、たゞ勝利、
いざや帆を張れ吾が胸のごと。

海に走りて

兒玉花外

心は金矢、脚は雲、
風に走り來、海の岸、
夕陽は沖に沈みたり、
巖叩いて悲歌すれば、
大和島根も環に揺れぬ。

あわ、世を捨てし、血を捨てし、
涙掌に盈ち熱情を
神にふりさけ灑ぐいま、
海なる空へ虹なして
驚きて散る寒千鳥。

髪も亂る、藻もみだれ、
怒る男波や、泣く女波、
玉吐きのぼる吾胸へ、
小石、小貝のたゞ濡れて、
捲きては返し返り捲く。

浪よ黙しぬ、トリトンの
笛は萬古の響なし、
去りて巨舟の腹を撃て！
わが血、わが歌、東海の
島をし洗ふ秋と知らずや。

海の記憶

上

齋藤 弔花

今日は日本晴れ、秋の氣山下に満ちぬ。野菊を摘みに出づる少女を伴ひて小山に上り、俯瞰してはるかに煙る海を見き。

こゝは茅渚の海つゞき。波静かなること鏡のごとくはるかに、紀泉の汀を紺碧一空の際に望む。正面の淡路島、翠巒を横へ、その木かげ、島陰、白帆の影に、波の晃めき、白堊の光、手を額にして歴々算へ得べし淡路島通ふ千鳥の鳴く音に覺めて、板戸洩る須摩の關守が昔偲ばれぬ。われは播州鹽屋の濱に、菘豆のからからと秋野の風に鳴るところ、この晴の日の白き光を背に浴びつゝ、松原つゞき、小丘の赭土に坐し、海沈みて深き色を成せる上を、漁り船の數をつらねて往來するを打眺むるな

りき

まことにこの海の秋に入りてより趣を加へ來り、岸打つ浪の音も寂しくなりゆけば、海近き山々紅葉を染め、雲の色澄みに澄みて、打仰ぐ眉も映らんばかりなり。紀州のあたりより、鳴門へかけて、とにかくに海荒らければ雲の色も嶮々しく、その戦の氣色立てるが平明なる中國海上のそれと相撞撃するところ、常に泉南の變化多き空合となるなり。されば、この雲の荒れすさむさは、この邊に近づかねば、唯、秋は、山川清水に浮ぶ木の葉の繁さに心づき、村の東を里と濱とに繋ぐ小橋の下、大根洗ふ童の歌に願へれば、但馬表の山景色のいと肅やかなる。

一夜、この事を友なる浩々歌客に語りしに、折柄、秋寒み、風も凍るべき夜嵐、浪華の北郊を裹みて、萩鳴らす小川の樋かけ、燈青き旅住居にありし歌客は、夜濤の興味を語り出で、客舎夜枕を欬て、濤の音の、

嶮く遠く虚明を渡り來るの壯大雄烈の中に、一種の幽哀なる情味、人を泣かしむるものありといひぬ。われも旅にして、谷川のほとりに、心寂しき夜坐、沈として蠟のごときところ、その頃、心に深く哀痛を感じて頻りに鴆毒を欲する青年一種の厭世詩人の臭味を有せる折とて、この自然の哀調は、われにとりては、實に無上興樂の樂絃に觸れし心地して、夜を徹して、圓かなる一夢をすら得難かりし。水の或は囁くや、其響、人の肺腑に入り、或は怒號するや、其音、天地を震撼せしむ。而かもわれは、かの寂寥たる、沈靜一道夢のごとき一日の光景を忘る、能はざる也。

下

これも同じ頃、一夏を須摩に過ごしける時の事なり、空晴れて、水紋も映らんばかり、平常さへ靜かなる海の、殊に風きて、汀に寄する慌しの

漣だになれば、一灣の沙路白く、一線夢のごとく、鴨越の翠巒に連りて、其裳の染模様、麗かに雅かなる状なり。

鎌倉の濱などには珍らしき貝殻散りはいたれど、この邊は拭ふばかりに一物を見ず、沙細かく、小石滑かなる外、海の拾ひ物は一草一本だになし、篩にかけたるごときこの汀の沙路を踏みながら、われ等は、毎朝、鹽屋まで朝食に膨れし腹を減らさむとして散歩し、歸り路には、保養院に潮湯を求めて一浴するを例とせり。夏の眞盛りといふに、立て籠めたる人々の秋立つ頃より漸次に減り初めて、敦盛蕎麥に旅脚絆、馬繫ぐ小松原に、腥きに湧くなる赤蜻蛉群を成して、平家か遺跡に飛び交ふ頃ぞ、鰯とる子の聲のみ獨り岸に高うして朝わが印せし下駄の痕を、夕暮尋ね踏むに難からず、夫婦など睦まじく、右に左に、あゝこの足痕は誰が裳さばきに残る香ぞと、漁師等の語り合ふまでに寂びれたり。

境川といへるあり、其源一の谷の奥より出づとばかり、天狗魔性の祟恐ろしと言ひ傳へ、近在の者ども避けて究めむともせず。水は西須摩の片ほとりに流れてこゝを攝播の界川とて、幅三尺に足らねども、名は附近に聞えたり。大抵は水涸れて、蟹の背を浸すに足らず、葦の莖、茶人の後鬢より薄く生ひたる邊を、水鳥の趾跡微かなるなど趣深きに、われは屢々この汀に憧れ寄りき。

一日、われの例のごとく散歩せしに、行き交ひしは上品なる商家の娘らしきが、四十あまりの老婢を伴れて、この川の澚に、何事をか樂しげに語らひ歩むなり。わが姿を見て、約しやかなる敬禮をなしつ、われは見識なき人のわれを知りつるは訝し、と思ひしがこの刹那、昨夜、京都よりわが隣房に移り來りし客のありしが、主人は名ある漆器商にて玉と愛でつる一人娘の、其顔美しきこと近く町の評判なりしが、去年の春、櫻、

祇園の夜に匂ひて、京は花の底に埋められたる賑かさに、人は嵐山よ、御室よと浮かれ廻れど、娘は兎角色勝れず、明鏡の一面、微量を帯びては、花も月も餘所なる景色なり。母なるがそと覗へば、四疊半に平生愛誦するといふなる観音經打披け、觀念の臉を閉ぢて時には室の外に洩るゝ溜息長し、これを見たる親の怪しみはいかに、年頃の女にあるべき他を思ひ染めての惱み煩ひか。さるべき仕付けはせぬものを。と折わりて慈悲を言葉の端々に籠らせそれにか、あらぬかと裏問へば、娘は母の手を執りて、わつとばかり泣き沈みぬ。黒谷の墓參の途すがら、老婢が主命を銜みて染々と訊けば、かくまでに母上の心を煩はせながら、なほ其上に褻みあらんは罪深し、實はこの間より心地例ならず、さりとして打臥すほどにもあらざりしが、庭の初櫻一枝と手伸べしはづみに、咳き入りてはつと迸る血痰一塊、これにて定命のほどは知れぬ。月日経たぬにわれは

草葉に脆き命寄する身ぞ、幼少より佛の御聲に歸依深かりしも何かの縁や、さりとは雙親の知ろし召さで、わが婚禮の晴衣は何、孫にはこれをと末の末まで案じたまへど、鬪體を飾る錦の衣、われに要なき死出の紀念、これを思へばこの小さき胸裂くる心地すと打歎くに、孝心深き嬢様の、かくあるべきことゝも知らず、かりそめにも浮きたることにやと疑ひまゐらせしは、申譯なし、と婢は感じ入りつゝも、あまりの事に膽潰しぬ、隠さんとすれど色に出で、娘の美しかりし頬は日に日に削るがごとく瘦せつ、驚き迷へる雙親の、日頃、自然は、花に歡樂の酒に酔ひ、月に歡樂の興に浮かるゝものとのみ思ひ居りしが、今はその温かき懐に生命の蘇生がへりを求むることを悟りて、千年の山河、青空、碧落、天地の寵、わが最愛の娘の上にと、只管に海神山靈を憶れて、この須摩に保養せしめらるゝとや、宿の媪の語りしを思ひ出でぬ。

幾多の悲劇は永久に流れて人の上に災ひしぬ。冀はくは、この廣き海
の力もてこの病めるを健かに、慈悲愛情の温光彼等一族の上にあれ、と
念じながら家路につきしが、其後須摩を思ふごとにこの日を思ひ、この
日を懐ふごとにこの少女を思ひぬ。

船 艙

平 塚 篤

まるで釜の中へほうり込まれた様なもので、薄暗い船艙の中は濕氣と、
温氣との蒸返された異様の臭氣が腸まで浸み徹る。彼方此方で病人共が
唸り出す。呼べど叫べど看護婦は愚か看護卒一人來るでも無く、遂には
衝心して苦しさの餘り七轉八倒の末はばたくと仆れる。見る限り人間
らしい顔付の者は一人も無い。或る者は柱に嚙り附いて頻りに息をはづ
ませて居る。或る者は片腕を無くして鮮血に塗れた軍装の儘右手にしつ
かりと戦友の頸を抱いてゐる。仰向てゐるもの、仰向に倒れてゐるもの、
船の動搖に委せて轉々懊惱してゐる者、折々船窓から吹き込む冷風も何
となく腥い様な感がする。元來が船には頗る弱い余の如きは、さなきだ
に病軀の上を、三十日餘り不斷に下痢して今や餘す所は唯だ骨と皮のみ、

大連を出帆してから既に三日一粒の米、一滴の水だも通さぬ咽は涸れて、聲さへも立たず、自ら慘たる四邊の光景の眸底に映るを不審しむ位の苦しき、此の船艙の温氣に蒸され、臭氣に襲はれ乍ら、更に一日を経たなら、些か乍らも猶は僅に四邊の物象を認識し得る余が神経も遂には永へに眠つて了うであらう。恁う思ふと一瞬の猶豫も出来ぬ。出来ぬけれども三日三晩を自在に翻弄せられて、骨も碎け、筋も切れたか、我身乍ら足腰の一寸も立たぬを何と仕やう。幾度か柱にすがつて立ち、起つては轟然たる響と共に一搖ぎの下に揺り倒され、氣は頻りに焦るが身は容易に運ばれぬ、余は泣いた。泣いては渾身の力を盡すが何の験だに無い。噫九月十四日は何たる悪日ぞ、旅順大要塞の探照燈に幾度か照らされ、大砲丸の響に幾度か結ばぬ夢を驚かされて、遂には身に創痕を蒙り、かて、加へて病魔の手に捉はれて茲まで運ばれ乍ら、故山の一景にだも接

せず戦を執つて仇に酬いん一弾だも發し得ず、青春二十二歳の生命をむざむざとむさくろしい病院船の船艙に横へねばならぬのか！と思ふと腦心を寸断せらる様な氣持がする。

凝じつと僚友の眠つた顔を見詰めるとそゞろに哀感胸をついて、ありし昨日の修羅の巷が、宛ら繪卷物の如く眼前に繰り返へさるゝ。と又何とも云へぬ嫌な氣持になつて、眸を閉ぢると、山は青々と、水清く空澄み渡つた故國の秋に、北滿洲の空を望んで涙を垂る、故舊近親の顔がありありと映つて来る。余は殆んど狂亂の如く氣を焦つて、渾身の力を双腕に込め、からくも柱に縋つて立ち上つた。腦は岑々と痛み、胸は早鐘を衝くが如く、約一間計を距つた上甲板への上り段に漸くホッと一息ついて取り附くと、何の事はない、只もう嬉しさに涙がこぼれて、わななく手足の戦慄を禁じ得ぬ。噤語が誰からともなく、聞えると、又しても衝心

したか右手の方の暗い船艙の奥から、何とも知れぬ大聲を擧げて、左舷への通ひ路まで来て仆れた者がある。上甲板ではメリ／＼と物を打碎く音、帆綱の唸り浪の聲、相錯綜して轟然たる響に化つたと思ふと、船は宛ら搖籠の如くに打振られる。

殆んど無意識に階の幾段をわえぎ上つて、宛ら海嘯に襲はれたるが如き上甲板に出ると、耳に鳴る風、脳心に響く浪の音、灰色の雲は低く海面を舐めん計りに疾走して、何所からとも無く浪の大うねりが猛然と突進んで来る。余は茲を先途と太綱に縋り附いた。瞬間の景は目睫の間に遷轉して、わはや大嶽余が身を掩へりと思ふと萬雷の響、海水は瀧の如くに余が全身を洗つて遙かの方に悠々と引上げて行く、新しき文明の智識を凝した六千二百噸の巨船は今や命も絶々に、只浪の狂ふにまかせて、極度の力を絞ると覺しき機關の音すら耳に鳴る風の裏から微かに私語く

如く聞ゆるのみ、余が想は空に、涙涸れて、只懸命に縋つた帆綱と共に五體は不斷に動搖してゐるのを意識する計りである。

見る間に後を趁ふて、暗灰色の大浪は矢の如くに驅り来る風を孕んで、四百の勇士の魂も碎けよと計りに突進して来る。船は上下左右に翻弄せられて宛ら掌中の玉を轉がすやう。余は眼を閉ぢ綱を攫んで、

『自然よ、何ぞしかく傲慢なる』

と大聲に叫んだが、胸は岑々とかみ上げて来る今昔の哀感に身も世もあらぬ痛みを覺えて、只打慄ふ双腕に縋つた綱の幸ひにして切斷せられず、半死の生命の辛くも一瞬を保ち得たのが無上に悦ばしかつた。

男の面

塚原澁柿

(上)

山を撼り樹を抜く昨日よりの大南風に、今日は車軸の大雨をさへ加へたり、熱田の海は掀翻し簸揚る洪濤の爲めに闇黒となれば、宮の市の往來は家の床をも浸すべきほどの洪水あふれぬ。其内で驛の本陣なにかしが方なる玄關には、紫地に白く三十三蓋の葵の紋染ぬける幕を高く捲らせ天目と呼ぶ黒摘毛の馬印に、青貝柄の對の道具、長柄の傘、いかめしく白洲に排列て譜代外様の諸侍そこにも此處にも詰合へる、奥の御居間には、平曲琵琶、甲の聲、乙の聲、はらり／＼と弾く撥の音、暴風雨にも紛れず、冴えて聞えぬ。聽けば福島船出の段なり。

上段の間に悠々と脇息に凭らるゝかと思れば折々はきらり／＼と凄じ

き眼光を詰合の士侶が面上に注がせつ、又餘念もなげに聽む玉へるは、是れぞ徳川三家の一家なる紀伊國和歌山五十餘萬石を知らず中納言頼宣卿、御年二十八、智慮にかけても若きに似合ぬ分別者と聞えし殿なるが武士道の穿議は又格別に嚴敷くて、義理とありては一寸も遁し玉はぬ大將なり。

「平家はかやうの折であるな、何時より身に沁て面白い、殊に今日は一段の出来善う語つた」。殊の外なる御賞美なれども、御座敷に聽聞の人々は、雨戸も障子も明放しの雨の屢吹に隙なきに、潮の逆立つ潑尻さへ懸りたり、別ては一種意味のおはす氣なる御所望の逆櫓といふに胸さへ胸湧れば一座の三浦長門守さへ其の妙音に耳を傾く暇すらなく見えぬ。

頼宣卿御機嫌ますます美はしく、

「こりや長門。」

長門守あつと御前へ進み出れば、

「聞いたか、今の琵琶。」

「如何にも承はつてござります。」

「其の義経が福島船出は、恰ど箇やうな大風でもあつたらう喃？」
すはこそこの面色を三浦、努めて顯はさず、

「御意にござります、大方は箇様な天氣……」

「今の子は、昔日の九郎と劣るか如何じゃ！」

睨め着るが如くにして宣ふに、豫て覺悟の長門守もはつと其の場に手を支へしのみ、劣るとは如何言ふべき、なれど優ると應へ申さば、桑名へ御渡海と言下に仰出されむは案の内なり、何とか申さむ、應へむ、との思案の頭に「何とじゃ長門！」

「恐れながら我門代つて言上いたさう、殿様には判官より右際勝ち

の名大將におはします。」突然として御座敷の隅より發てたる洪鐘聲を人々あはやと驚き視れば、是れ番頭の松平三郎兵衛忠尚なり、彼は居常奴を立て、口外したること後へは退ぬ大強者なり。

頼宣卿、彼と御覽じて、愈御心地よ氣に打笑せ、

「三郎兵衛か、お、其方が善う申した。予も九郎に負けぬと思ふ。」

「如何にもお負なされませぬ。」

「其の負けぬ予が、その義経の上手を越えて、此逆風の大雨に、桑名の海を乗うと思ふ。如何じゃ三郎。」

嗟決矣哉、日頃より一旦の仰出されありたる後は、其以上の道理を申さねば御聽納のおはさぬ殿、三郎兵衛また名にうてたる強情者、此の君臣の恁く口の會たる上は此の事何と止るべき、さるにても憎きは三郎兵衛能にもあらぬ追従の無駄口たたきし結局は御家の讐——御意御道理とも一

言いはば此座にその素首打落し、我も此腹搔掻きて、血を以て御諫止申上げんず、素好何とか言ふ？と疾視へ着けたる長門守を、三郎兵衛横目にも顧ず、又何の遠慮氣もなく、

「これはしたり、殿、然様の御意あると存じなば某は然は申さぬ。あの福島の馬鹿力味など力ませられぬ殿と存じて、九郎勝りの大將とは申上げた。此は殿様御誤り……」

言せも果てず今迄の御氣色猛に變りて、

「や申すな口伶俐い、汝然様の奴とは存せで大事の番頭申付けたが……、あ、これで見れば予は九郎に劣ったか！九郎が手には筒様の奴は居ぬ筈じゃ！」

大息ついで御脇息はた〜と叩かせ給ふ。

「は、殿様には異なる御述懐、我侶義經に勝つた殿と申上げたは、殿様

は姑らく措き紀州の御内には、辨慶、常陸房、佐藤兄弟、龜井片岡の勇士にも勝れた士があると申すこと。」

「何と言ふ？予が内には九郎が四天王にも勝つた猛者が？え、其證は？」

「筒様申す拙者を初め……」

「む、然らば一も二も無い、主の供せい！先途に立て！予は是が非でも此海を乗る！」

彼は臆せず、

「然やらの御決心と承はれば何とて御供に外れべい。なれど御供惣中乗る、其船がおざりませぬ。」

「む、！」

と暫時御思案の體なりしが、

「……何さま船が無い。然らば予が乗替の船！尾張殿より馳走に出され
た丈夫の關船に、士どもの取乗せて出帆せよ。」

「えい何と？然らば輕き士共は殘れよとや？大身歷々御供にて殿様御渡
海とおさらう後に、外様輕輩とて、縦ひ其船惡しきとて其故にて、此地
に駐まる者一人とござあるべいか？近頃以て情ない御沙汰！それは罷り
成りますまい。」

聞し召すより御機嫌もや、愈りぬ。

「然様であるか、道理じや、さらば選船に直參の士大身小身殘らず乗せ
て供させい。但し又者雜人は……」

三郎兵衛、一膝進めて、毛虫の大眉に波搖たせ、御座の邊りを砲手と
睨め、身を斜に構へて、

「やア殿、其義は猶成り申さぬ、其身々々の主人々々が此の大風大浪を

亂して殿様御供に立ち申すに、又者雜人草履攫まう男とて、凡そ紀州の
水飲んだる者、おめくくと此地に残って、主が潮喫ふさま、安閑と傍觀
てさ居申さうかい！敗船壞船になり取棄て、追つゝいて主の供し、敵は
ぬ時は海に飛入り、刺違へ腹屠ても果て申さう。然やらの御沙汰は殿様
御意じやとて到底もが能り申さぬ事！」

言ふかと思れば其の鋭き眼よりはら／＼との涙露は御翻れたり。

頼宣卿はや、暫し彼が落涙の體を御覽ありしが、御自身も疊紙に御眼
臉の雫をかき拭はせ猛に御細取て棄られ、東へ向はせて、

「あ、御免あれ上様、頼宣不肖にして御預りの國侍らいを危ふく魚の餌
といたさんとして候、前非後悔のたゞ今は何と申解くべき辭とて候はず。
しやア三郎兵衛、其方の忠言で善う悟つたぞ、げにも大將は九郎には劣
つたも臣下は皆辨慶勝りじやな、紀州の兵は剛者じや、臆れたるは又者小

者にいたるまで一人も無い喃。頼もしいぞ嬉しいぞ！」

即座に路筋を換られて、佐屋を桑名へと渡らせらる。

(中)

小山の如き洪濤の咆と碎けて、纔かに澳合を露はす處、看る／＼一隻の小艇あり、舳先高く、艫低く、船體を一面に漆黒く塗れるに、八挺艇を立てたるは、豫て萬一の用意として熊野浦より熱田の濱に繫泊はせたる鯨船か、船子はもとより荒潮を乗るには熟れたり、寄する波には凸所に乗り、引く浪には凹所に沈み、逆らはず、亦撓まず、胴を据ゑ、腕を固め、兩足を船板より生えたる如くして、軀體の上半を斥らせつ屈めつ、しつ／＼と諸聲を合せて、漕ぎに漕ぎ、盪しに、盪せども、大南の逆風は彼們が頸を吹き斷るが如く落して車軸の大雨は彼們が双眼を撲潰さんばかりに降注げり、必死の力、先途の擬勢もこゝに竭きて、あはや此船、

舳先を高浪の下に突込み、一同今が千尋の底に捲き入れられんすと見る刹那、胴の間よりすつくと起たる一個の武士、暴風雨を劈く洪鐘の聲を發して、

「桑名の城櫓が今見えたぞ！」

此の一聲に勵まされて、水夫は再び艇を立て復し、「曳さッ！曳さッ！」桑名の城櫓の見ゆるか、見えぬか、既に彼は目も昏暈るに、吼る潮は頭上を越えて、呼息も吻けず、氣力も繼かず、又も腕の衰へ來りて、二番艫、三番艫、も續いて仆れぬ、一番艫は聲を揚げて、

「旦那もう敵はねえ！」

「汝、紀州の汚辱——御國の恥辱を知らぬかッ！」

大刀提げて起上る武士の袂を抑止て、

「む、御道理だ、此處で平伏ては紀州の恥辱だ。潮にも奪られる、風に

も攫られる、腕の抜けるまで遺附ろ！」

按針の爺老は叫べり。

「可し、む、命は預けたぞ、熊野の漁夫が腕、見て呉れい！」

一番臚の應ふる聲に、仆れし水夫等も勃乎と起て、

「兄貴、何せ一命だ已達も遣る熊野兒だ！」

紀州の恥辱、御國の汚辱、熊野浦の恥辱、といふ氣を恢復せし水夫共は、如何に漕ぎけむ、如何に盪しけむ、さしもの七里の海上の、激浪、怒濤、大風、暴雨、千艱萬難、十死一生の波の底を潜りぬけて、あらめでた！伊勢の桑名の濱に着きたり。

「出来いた、大義じや、改めての褒美は後日の事、今は先づ三郎兵衛が心祝じや、」

具足櫃の蓋を開きて、大判十枚、暴雨にうたれて洗ふが如き白砂の上

に、黄金の光灼耀き渡れり。

(下)

往來の旅人を警戒むる制止の聲いかめしく、足輕の弓鐵砲、長柄、打物、對の道具、箱、引馬、前駈後從に圍繞せられて、今や桑名驛の入口なる列松の下に差懸り玉へるは、昨日宮より佐屋廻りせられたる頼宣卿なり、

宿の役人等が御出迎として罷出でたる棒端より一丁を進みて、具足櫃に槍一筋、其身は床几にかゝりたる松平三郎兵衛、御供先の見ゆると頓て、突立ちて御駕の傍につか／＼と寄り、

「やア殿、三郎兵衛御迎に參つてござります。」御駕はひたと駐りぬ。

「お、汝は三郎兵衛、好うも予を出抜たな。」御機嫌は斜めならざりき。

三郎兵衛御戸の際に蹲踞て、

「御意、恐れてはござりまするが、殿様を御抑止申し、我們また其供しては三郎兵衛男の面が立ちませぬ、」

「えい、其面、予は最一度見たいと案じたぞ。」

御目を徐ら拭はせ玉へは、三郎兵衛他目も忘すれて泣き出し、

「わ、我們も其御詞御叱りの御詞でも、生前に今一度と……」

昨日にかはる松の下風、いと和かに君臣の和會を祝する如し。

嵐の夜

小林 鐘吉

今し夕の色は迫つて來た、

靜に晴れた濱日和にも沖の風は遠くから白い獅子毛を振つて漫々たる深藍色の大海原を奔馬の如くに猛つて來る太平洋の一角。頃しも二月の空の雨曇りした水平線上は物凄まじく暗くなつて暗い幾重の雲の中に様々の形の雲が或は崩れ或は離れ一つに列ぶと見る間に高く舞ふもの低く暗さに隠れるもの煙の如くに霞み去る跡からは砲彈の如くにむくくと揺られて走るものが間斷なしに跡を追つて何時まで過てば晴れるものやら只一面のニユートラル、チントの色が黒幕の如くに垂れてゐる計り。

時は丁度五時に近く樓上より見渡す海景は只同じ色同じ聲同じ波動の繰返し繰返したる計りであつた偶然見ると左手に高さ犬吠崎一帶の長い

黄土色砂土石の岬は斜めに照らす雲間の夕陽に輝やいて其の上に聳ゆる
白色の廻旋燈臺は眩い計りのロースマダーに見えるのである。

遙かに遠き海原つゞき忽ち一點橙黄色の光が輝くと水平線上にぼつり
くくと星の如くに列ぶ十數個の光りは暗いく沖の空を背景にして東よ
り西へと次第くく増へて来るのは長崎あたりに返へると見へる金色の
帆船捲き返す波の影に一つ隠れて一つ顯はれ高くなり低くなり次第く
に進むと見る間に忽ち一つ消え二つ消えて烈しい色の失せると共に帆の
色船の形もばらくくと朧む小雨に霞んでいつしか沖は暗くなる。

風さへ少し加はつて波は次第に高くなつた。見る間に海は暗くなつて
樓上の部屋に燈火が點いた。階下には雨戸繰る音一しきりして裏山つゞ
きの松の風が波の音に加して聞える計り寂しさはいよく増して來た。
燈臺の方を顧ると白色の爛々たる光は太き一條の虹の如くに顯はれて絶

間なく廻りくくて海の上遙かに照り返してゐる。と沖に汽船の笛がかす
かに鳴つて其かと思ゆる細かい燈火が波の彼方に見え隠れして夜は愈々
更けて來る。

風は愈々烈しくなつて寄せ來る波の打ちつける毎に家はぐらぐらと揺
れる様でざわと海岸の岩の間を引き行く潮の長い音に呆然してゐると忽
ち沖に眞白な波が顯はれた。空は暗し星屑一つ無き海の面は只音のみ聞
こえて形なき暗々たる波の上に一二丈も有らうかと思はれる海嘯の如き
光りに驚かされて友なる一人を呼び立てるとのつそり傍に近寄つて來
る。物も言はず遙かの沖を指すと波は遠くに輝きつゞ次第くく近くな
つて半里程迄寄せて來ると忽ち其が消えて了ふ。

又もや沖を眺めると沖には又も眞白き波、

「何だ燈臺の火が射すんぢや無いか」

同伴者のいふのに落付いて見ると波の寄せ来る道に當つて燈臺より射す火の虹は爛々として輝いてゐる。

果ては二人共笑ひながら部屋に這入るに風に吹かれた着物は濕つぱくじとくするるので火鉢に寄つて話し切つた

「何だ君彼れあ」と不意に友は後方の障子を指した。

「ム、」と言つて顧へると二枚立てた東窓の障子の左の方丁度真中頃からたら〜と雨でも漏つたかと思はれる様な班點があり〜と残つてゐるので、立上つて手で觸つて見ると全く濡れてゐるのである。

「何だらう!」「さあ」と二人等しく考へて見たが何處からも雨の漏る處は無く雨滴や雫吹のかゝる程の雨でも無いので何とは無しに不思議に思つて黙つた儘に座らうとした。

丁度七時を打つた。

かすかに猫の聲がして階下では既に寢入つたと見えて話聲さへ聞えなかつた。するととん〜と猫の階段を昇る足音がして一つ隔つた隣の部屋の前迄来るとびたりと止つて鳴き初めた。戸外には絶えず波の音あるか無さかの雨の雫に松の梢の風の聲何とは無しに氣味悪い夜は次第〜に更けて行くので耳は愈々冴えて來た。

宿の客としては一部屋隔つた隣の若い商人風の書生平常白足袋に三尺帯の茶色を締めて藥瓶を三つ四つ列べた机の前で酒呑みながら太つた女中相手に英書を讀む男の外は六部屋計り離つた角の別室に老女を伴れた二十二三の銀杏返しの令嬢計り未だ遊山がてらの客の來る時候では無いので大きな家は只廣くて、寂しさはいと増すのみである。

猫の聲は愈々鋭くなつてコトリ〜と歩いて來て部屋の前まで鳴いて來たが臆てけた、ましく叫びながら北隣の部屋に這入つて行く自分は

突と立上つて洋燈を取ると隣境の襖を開けた。薄暗い部屋に射し込む光に物凄まじくうなりながら壁に背を寄せて出て来るのは眼ばかり燦く黒斑の大猫背は一面雨に濡れて漆の如くに光つてゐる

「おい来て見んか」

「何だ、く」と友の来る間に猫はする／＼と駈け抜けて階子をとん／＼下りながらも唸るが如くに鳴いて行く坐敷は六疊の北窓で壁によつて疊二枚は如何いふ譯か上げてあつて隙漏る風が何處ともなしに洋燈にあたる氣味悪さに二人はそこ／＼元の部屋に還ると其の儘、友は寢衣に脱ぎかへて着物をはたきに廊下に出る。

折しも雨はさつと音して吹き付ける風にがた／＼する雨戸を一寸見かへると次隣りの部屋では開けひろげたる障子をもれた燈火の光斜めに廊下に射して三尺計りの刀の光が手先は見えず尖のみ見えて燦いてゐる。

友は無言で手真似で招く密と覗くと刃の光りにぎよつとして黙つて友の手を取つて顔見合せてべつたり坐つた。

「何だらう」

「さあ如何するつもりか、夜、人の寝る時になつて仕込杖を磨ぐ奴も無いぢやあないか」

廳でゴシ／＼刀を磨ぐ様な音が暫時するので床に入つても寝てゐられず起きもせず、息を殺して考へながらうつら／＼と睡くなるとはつと驚く波の音、部屋は依然として薄暗く、洋燈の油煙が細長く立昇つて何とはなしに寝苦しいので立つて東の窓を開けた。

さつと吹き入る海の風、しつとりとした磯の匂ひに眼醒めた様にうつとり彼方の空を見るといつしか晴れた空の星は一つ二つと數へられて休む間も無い廻旋燈臺の火の虹は斜めに部屋に射し込んだ。

難 風

山崎紫紅

是は鎌倉方より出でたる僧にて候、我いまだ高祖の御跡を見ず候程に、この度思ひ立ち伊豆の伊東へと罷越し御靈蹟を拜み廻りて候、是より都へ参らばやと存じ候、急ぎ候程に下田の浜に着きて候なうく船頭殿、其船は何方へ参り候ぞ、なに沼津へ行くとや、さあらば我れをも乗せてたまはり候へ。

潮は清き中秋に

伊豆の大海の船の路

遠に花散り近きはとゆる

高浪はしり礁を打つ

雀の岩に近づけば

指を立てたる奇しざまや

天城嵐を正面に受けて
神子元の嶼を横に過ぎ行く

海豚は波に躍りあがり

海路の興を添ふれば

船人は艦の間に集ひ

汐ふく鯨の物語す

この泰らけき海面に

秋のならひと云ひながら

怪しき雲の一とちぎり

島の間立つわ立つわ

船頭は騒ぎたて
やれ水夫よ、帆を下せ
石廊へ歸せ、仲木へ着ける
大海原に入挺の鰯

えい

それ漕げ、まつかせ

えい

やつし、やつしつし

鰯柄も折れる、腕も抜ける
陸地に着くまで傍目を觸るな

あれ、あの雲の大きうなつたぞ
合點じや、よつしえいしつし

黄ばめる空に雲擴がりて

ざんざ雨、なる神、なる風

長津呂の鼻も隠れて

浪は幾多の小山と化しぬ

雨は礫の板間をうてば

風は曇みし帆を引きさちぎり

天上天下一葉の

船を苛なみ颯りたり

舵も勝も用を爲さず
いな人既に力盡きたり
ある者は斃れたり
ある者はうつぶせり

帆柱を抱へたるもの
船梁に絶れるもの
親方は臚勝の傍に
空しく舳を睨まへたり

何處へなと引いて行け
水臑も汲むまい、舵も捨てう

磯に中らば骨灰微塵
船の割れるを最期と覺せ

悲みは船を掩ひぬ
死の影は襲ひ來りぬ
風の腕は舳を突く
浪の手は船縁を握む

胴の間には乗合の
口惜しとのゝじる聲
情無しと泣く聲の
あらぶる神の樂に和したり

死よ、いまは末期よ
法師在すぞ、引導を
後生の爲めに説かせたまへと
涸れ涸れに口口

げに鈍まし我れながら
などで小板を抱へてありし
船のすべての生命を助くる
板は身に持つ法師にあなるに

肉身は動かうとも
な恐れそ、最期の大事ぞ

獄卒に持てられて
無限の暴風にな咀はれそ

沙門一人ここにあり
船中の人心安かれ
後世の安くは現世の
難風の恐ろしからう

祈れや禱れ後の爲め
暴びて吹けて東南の
風も強かれ、船も沈め
面面なほも風を祈れ

題目を讀み候へ
龍神恭敬の浪の太鼓に
のれや囃せや御經の
題目を唱し候へ

家も無けれ身も無けれ
風も無けれ、唯あるは
紫摩黄金目前の奇特
十體百體皆是の菩薩

みな同音に誦し奉る
題目の聲ぞ尊き

船こぞりて即身成佛

この世からなる寂光の城

あわこの浪の止まざらましば

地涌の薩陀の員に入り

靈山依囑の譽を人天

十方世界に揚げなんものを

嗟この風の風ぎたることよ

前世の罪業深くやわりけむ

雲間を洩るる日光に

信心難風と共に薄らぐ。

船路のわかれ

せせらぎ

婢、來りて、蟻成れりと告ぐ。いでわれは去らざるべからず。座を立つて天を望むに、雨蕭々たり、霏微して人の膚に迫る。停まつて顧みる。娣になほ語らむを欲するの色あり、われまた聽くを希ふの意なき能はず。

おもふ、娣を訪ふ三刻の間、相見て黙々たり、泪ただ淫々として流る、相對して言なきこと静、石に似たるも、相別れむに、適いて誰にか吐かむ熱、火のごときこの情ぞ、後會期し難きにあらざるも、多感、哀動く切なるに、この人を棄て、包藏豈によく堪へむや、盡さず盡させざるこの傷を裏むで、躡々としてわれは夫れいづくにか去る。

婢、ふたゝび來りて、舟子俟てりと傳ふ。いざやわれは去らざるべからず。

らず。

歩して椽に出づ。送り到れる娣の、形衰へ、顔げにも荒めり。逡巡して往くを得ず、手を把つて繾綣のさらに加はるを覺ゆ。口吃し、腕痿え、腸裂けむとす。

おもふ、人生離合はもと天なり、逢ふや逢はざるべからざるの機ありて逢ひ、離るるや離れざるべからざるの機ありて離る、逢ひて懷を遂げず、離れて心を残さば、億劫人の手に再し難き契なるを、多恨、愁賣る切なるに、この時を措いて、韜晦豈によく保たむや、悉さず悉させざるこの悶を抱いて、遅々としてわれは夫れいづくにか去る。

婢、みたび來りて、日暮れなむとすと促す。さらばなり、われは遂に去らざるべからず。

一張の傘、身にかゝる雨は凌げど、袖をしぼる露を避くべくもあらず、

跟き随ふ娣を御くる、胸は闇、眼は霧に鎖ざされて、惱みがちな足取の、跟踏として危しや。岩を鑽りたる棧道を下りゆけば、秋の海さびしらに、白きは潮けふり、紅きは晝顔の道艸に咲いたるのみ見ゆ。西の方、わが家の在るあたり、一髪の妹鬢、水を隔て、影おぼる。

袂を拂つて舟に乗る。舟子二人、壯にして剛なるもの臆を押し、少にして健なるもの懼を操る。木強の兒、鐵腕曳々として努む。波幾うねり楫幾かへり、倏ちにして歌絃の相磨ふるを聴く、見返れば娣なほ汀にイめり。

酥々の雨はわが傘を打ち、洶々の濶はわが衣を霑ほし、揺々の舟はわが魄を躍しぬ。樓臺吹する歌絃の聲の、飄揚していまはた髓に泌する溽陽江上の悲、汐路のあなた窺へば、波がくれする藻の花や、水天空濛のうち、娣なほ汀にイめり。

おもふ、家に歸つて慰藉なし、ゆく手に光明の待つあるにもあらず、弘誓の纜断れ果て、別怨、離憂、交も寄する濤の上のこれや寔に捨小舟、情縁薄しといへども、島はわがために念々鏤骨の地なるを、多涙、慘催す切なるに、この處を出でて、飛遯豈によく忍びむや、磬さず磬させざるこの煩を齎して、佻々としてわれは夫れいづくにか去る。

舟進みて、倏ちにして急雨、倏ちにして大霧、舳に當るわが土甘の里は、混茫一氣判するなし、艫に蔽ふ神女います島山は、一廓の高樓、依稀たるかな、燈搖らいで夢にも似たり。陣々の風渡る、歌絃聴こえず、末黒の汀、人ありや、望めど、眺むれど、娣の影の遂に見えず。

滄々の霧、斜々の雨、崖白きところ黯きは何の魔ぞ、杜黝きところ白きは何の妖ぞ、呼應の聲、水と相搏ちて、舟飛ぶがごとし。島の光浸く銷殺し、陸の色浸く更生す、前を睨すればや、歴々、後に瞶むればす

に冥々。蓬々の風渡る、歌絃聴こえず、未黒の汀、人ありや、望めど、
眺むれど、娣の影の遂に見えず。

あゝ、島山のこの夕、われと娣と、路これより西東するに、ひとたび
相乖いて、いつの日にかまた相擁せむ、われは軀に疚あり、娣は心に痛
あり、人はこれを割き、世はこれを隔て、惘惘の愛漸く疎ならむに、わ
が救を缺いて、彼れが惑はいよゝゝ深く、彼れが慰を絶たれて、わが苦
はますゝ激しからむ。家あれども、寧むせず、漂萍は彼れが羈絆なり。
郷あれども、容れられず、孤獨はわれの桎梏なり。生れて兄娣たり、何
の因ぞ、分かれて行路の人となる、そもや何の果ぞと、瞑目して互みの
運のつたなきに泣く。

舟はやく磯に著けり。日はまたく沈みたるらし、霧籠めたる平沙の上、
寂々として人を見ず、夜目にもしるき島山は、雨微かにして林色新なり、

附 録 終

歩々にして家は脚に適し、行々にして島は背に遐し、あゝ、あゝ、戚々
としてわれは夫れいづくにか去る。

去らむとして往きあへず、立ちもどり飢かず観る。一灯あり、光勁く、
熒として島より飛ぶ、離魂迷ふて趁ふにわらざるかを恠しむ。娣やいか
に、この霧の夜を、雨の夜を、その衿の色濃きを褪せしめざれとこそ。

明治十四年六月十五日發行
明治十四年六月十三日發行

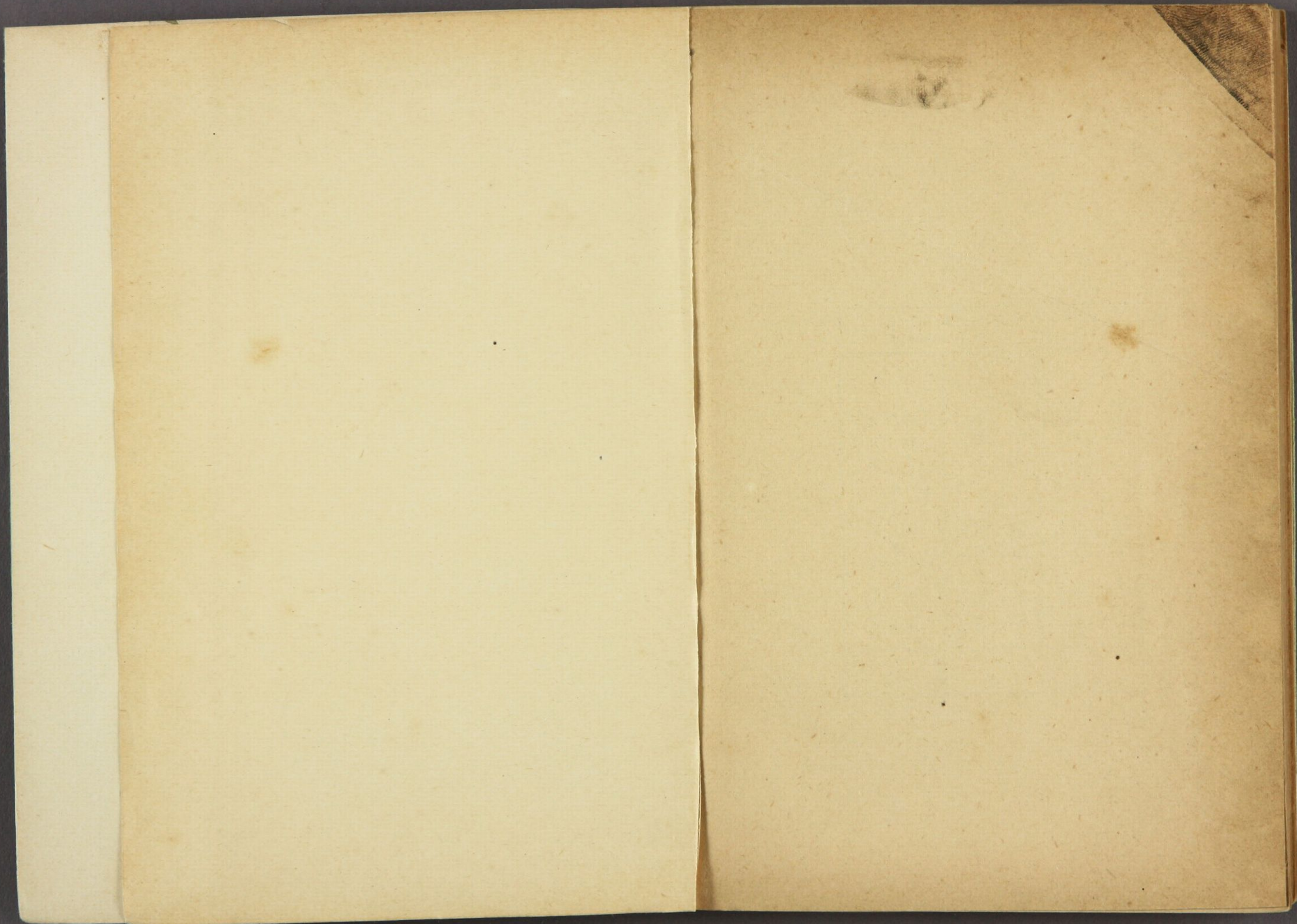
著者 伊藤 銀月
發行者 河西 義郎

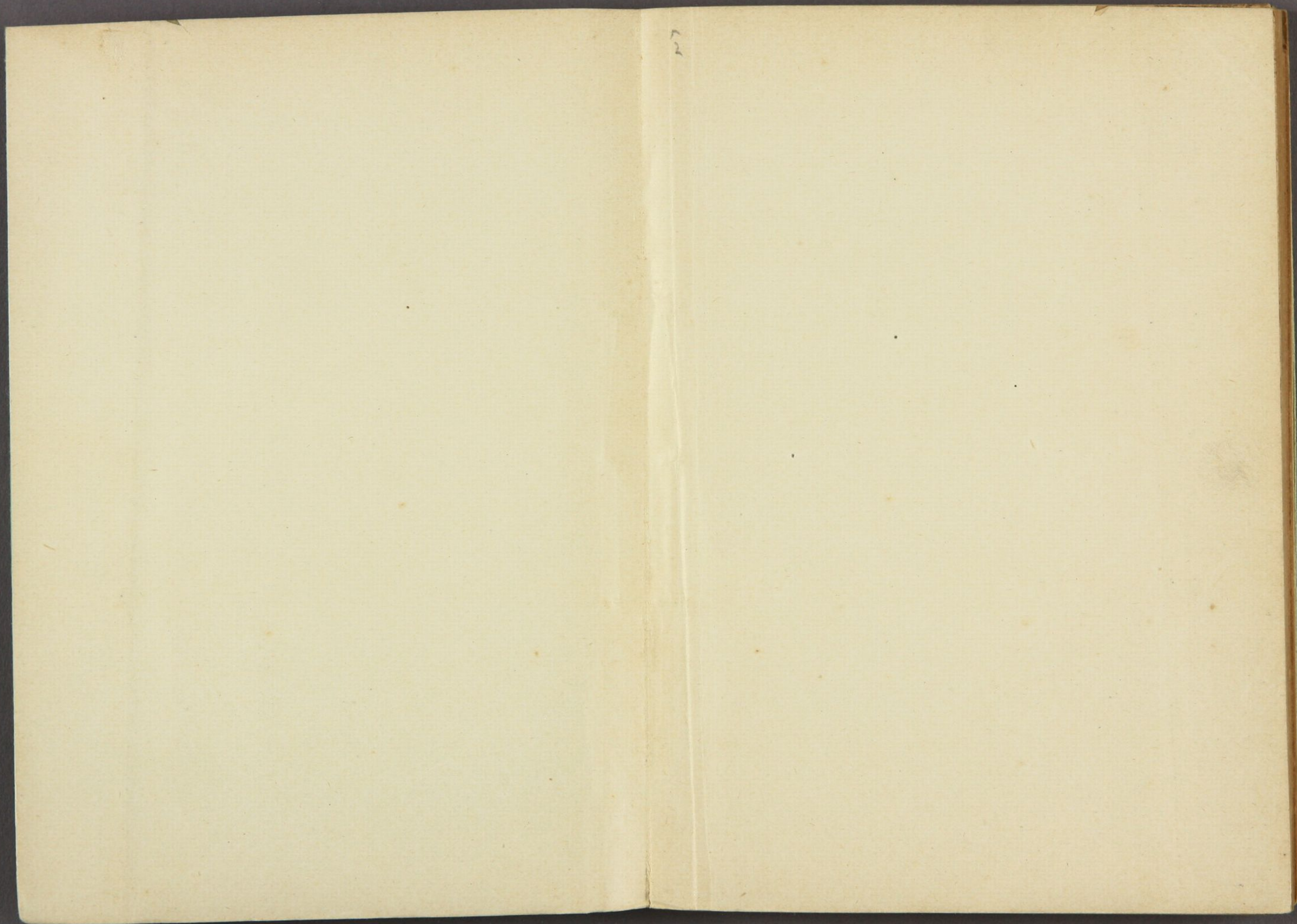
發行所 東京市京橋區木挽町四丁目
左久良書房
東京市京橋區木挽町四丁目
取次元 也奈義書房

印刷者 東京市京橋區弓町二十四番地
高塚 慶次
印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地
三協印刷株式會社

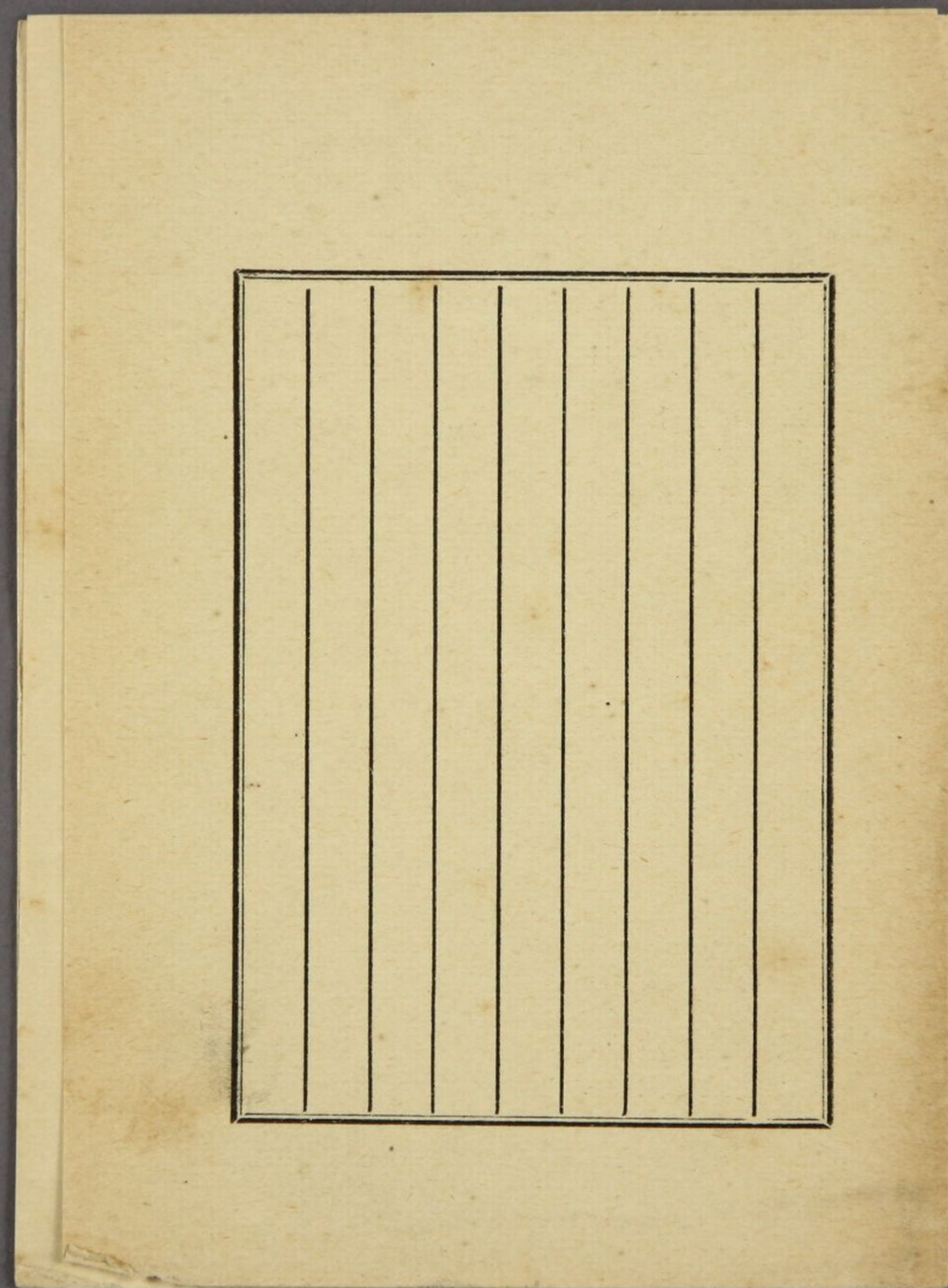
一冊 郵稅 金拾五錢

1473





27



出版圖書目錄

東京市京橋區木挽町四丁目
左久良書房

生田葵君著	小富美子夫人	送金八拾五錢
戸川秋骨君著	西詞餘情	送金六拾錢
柳川春葉君著	獨身者	送金七拾錢
平野萬里君著	若き日	送金四拾五錢

あやめ會詩集第二	豐旗雲	送金四拾貳錢
村山鳥逕君著	宗教小説 ささにごり	送金五拾八錢
小杉未醒君著	畫集 漫畫一年	送金九拾五錢
生田葵君著	小説 富美子姫	發賣禁止
河井醉茗君選著	詩集 桂の卷	送金參拾貳錢
磯津水君著	樂天文學 太郎冠者	送金五拾六錢
運塚麗水君著	紀行文集 ふところ硯	送金七拾八錢
岩野泡鳴君著	一大奇論 神秘的半獸主義	送金六拾八錢
岡鬼太郎君著	花柳小説 晝夜帶	送金四拾五錢

伊良子清白君著 詩集	孔雀船	送金七拾六錢
國木田獨步君著 小說	運命	送金七拾六錢
馬場孤蝶君選 詩集	春駒	送金參拾五錢
沙上寫隱著 寫真珍書	小影	送金貳拾八錢
齋藤甲花君著 小品文集	心扉錄	送金參拾五錢
馬場孤蝶君選著 詩集	花がたみ	送金參拾四錢
細川花紅君著 小品紀行	茂志保草	送金六拾八錢
細川花紅君著 小品紀行	うぶ聲	送金參拾九錢
細川花紅君著 寫真文集	影	送金九拾八錢

出版圖書目錄	
東京市京橋區木挽町四丁目 也奈義書房	
正岡秋子女史著 小說	折れ櫛
	送金四拾五錢
	送金六錢

藤村操著	書珍煩	悶	記	送金料參金拾四錢
大我會編纂	日本修身旅行	也奈義書房編纂	最新東京案内	送金料四金拾六錢
伊藤政子女史著	小杏葉牡丹	伊藤政子女史著	小杏葉牡丹	送金料五金拾八錢
本田濱太郎君著	小奴島田	醫學士佐藤得齋君著	科學的情慾觀	送金料九金拾錢
正富汪洋君著	小短歌詩小鼓	醫學士佐藤得齋君著	科學的情慾觀	送金料五金拾六錢
鹿島櫻菴君著	結婚之秘訣	醫學士佐藤得齋君著	科學的情慾觀	送金料四金拾八錢
千葉秀浦君著	結婚之秘訣	醫學士佐藤得齋君著	科學的情慾觀	送金料四金拾八錢
三木天遊君著	小戀愛問題	醫學士佐藤得齋君著	科學的情慾觀	送金料六金拾五錢